



# 八万町の昔を探ろう

## ガイドブック

平成20年度文化庁芸術拠点形成事業(ミュージアムタウン構想の推進)  
「八万町の昔を探ろう」から地域をプロデュースするプロジェクト  
Hachiman Town Experiencing History Project



「八万町の昔を探ろう」から地域をプロデュースする  
プロジェクト実行委員会



## はじめに

「八万町の昔を探ろう」と銘打って徳島市八万町での歴史散歩を始めたのは、2004年のことでした。最初は徳島県立博物館友の会行事として企画し、その準備のためにフィールドワークを繰り返すというものでした。少しずつですが文献をあさり、八万町を歩き、聞き取りをし、石造物を調べました。博物館友の会行事として毎年「八万町の昔を探ろう」という歴史散歩の行事を実施し、パネル展示もしてきました。いつしか5年の月日が流れ、僅かばかりではありますが蓄積ができてきました。

そんな中で実施したのが、文化庁の委託事業である平成20年度芸術拠点形成事業（ミュージアムタウン構想の推進）「『八万町の昔を探ろう』から地域をプロデュースするプロジェクト」です。この事業の核となるのが、このガイドブックの作成です。調査、イベント、小学校による調べ学習などを通じて、蓄積してきた成果を少しでも多くの八万町に住む皆様に見ていただけたら、学校の教材としても使えたら、そんな思いでつくった歴史散歩ガイドブックです。さまざまなイベントや学校行事から日ごろの散歩にまで、幅広く活用されることを切に望みます。

最後になりますが、本書作成および本プロジェクト実施にあたり、八万町内をはじめとして多くの皆様および関係機関の多大なるご協力とご指導を賜りました。心よりお礼申し上げます。

「八万町の昔を探ろう」から地域をプロデュースするプロジェクト  
実行委員会 会長

# 《目 次》

はじめに .....	3
目次 .....	4
ガイドブックをもって八万町を歩いてみよう！八万町の昔を探ろう！ ～本書の使い方～ .....	6

## [I]ガイド編

### 1 小学生による八万町の昔探訪

1)八万南小学校区 .....	8
2)八万小学校区 .....	15

### 2 エリア別ガイド

A 内浜・夷山・大坪・下千鳥・千鳥・橋本・馬場山・宮ノ谷 .....	20
(下福万を一部含む)	
B 橋北・法花・法花谷・向寺山 .....	32
C 上長谷・下長谷・新貝・寺山・東山 .....	42
D 柿谷・柿谷山・上福万・下福万・福万山 .....	50
E 中津浦・中津山 .....	62
F 犬山・大野・沖須賀・川南・武丈 .....	72

## 〔Ⅱ〕資料編

### 1 はちまんの山とくらし

- 1) 山の神信仰 ..... 88
- 2) 祀られる武将の祠 ..... 98

### 2 はちまんの谷と川

- 1) 水神信仰 ..... 102
- 2) 谷と水と伝説とくらし ..... 105

### 3 はちまんの里と祭り

- 1) 地神信仰と社日 ..... 108
- 2) 庚申塔と庚申信仰 ..... 118
- 3) 四季の祭り ..... 120

### 4 写真にみるあこのころの八万町 ..... 124

## 〔Ⅲ〕参考文献

- ～もっと知りたい人のための参考書一覧～ ..... 132

ガイドブックをもって八万町を歩いてみよう!八万町の昔を探ろう!

## ～本書の使い方～

◆本書は、徳島市八万町における歴史散歩のためのガイドブックおよび学校教材としてご利用いただけるよう、〔Ⅰ〕ガイド編、〔Ⅱ〕資料編、〔Ⅲ〕参考文献一覧という構成になっています。歴史散歩のおともに「ガイド編」を、読み物として、あるいは民間信仰等に関する資料として参照される場合には「資料編」を、ご自身で詳しく調べてみようとお考えの場合には「参考文献」を、それぞれご利用いただけるようになっています。

### ◆ガイド編 小学生による八万町の昔探訪

八万町を校区とする八万南小学校および八万小学校の4年生によるものです。平成20年度に実施した調べ学習の成果をまとめました。

### ◆ガイド編 エリア別ガイド

2、3時間程度の歴史散歩を考慮して、八万町をエリア区分しています。これは、実際の町内会や小学校区とも異なる本ガイドブック独自のものです。また、エリアごとに現在の略図と、文化5(1808)年山瀬佐蔵らによって作成された『名東郡下八万村分間絵図』(徳島県立図書館蔵)を掲載しました。なお、絵図中の注記は活字化しました。

### ◆資料編

八万町の山の神、水神、地神など民間信仰と石造物についての調査報告です。読み物としてもお読みいただけるよう配慮しました。

### ◆参考文献

八万町の地域史についてもっと詳しく調べてみたい方のための参考文献一覧です。本書をまとめるにあたって参考にした文献の一覧を掲載しました。



# 〔I〕ガイド編

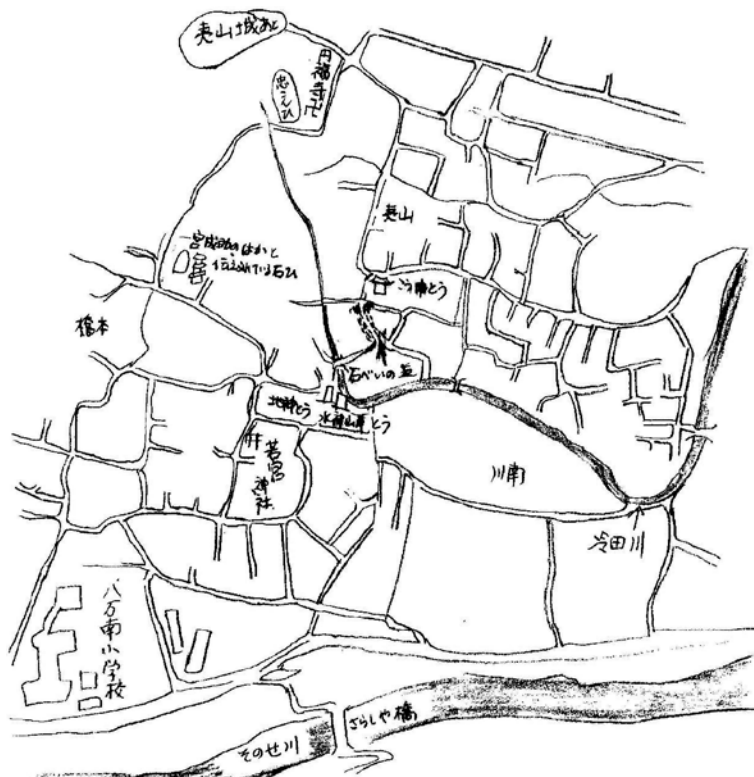


写真 上：金剛光寺跡付近  
下：雲水庵跡付近

# 1 小学生による八万町の昔探訪

## 1) 八万南小学校4年生の 八万町探訪

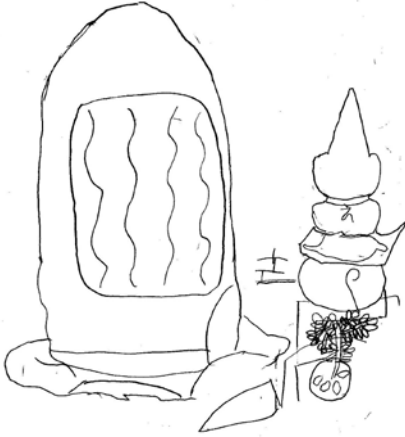
わたしたちは、八万町に残っている昔の様子のでわかるものをたずねて、調べに行くことにしました。夷山、橋本地区のフィールドワークで、神社やお寺、石碑などをたずねました。八万町が昔どんなところだったのか、年中行事や祭りはどんなものがあつたのか、昔の八万町の人々のくらしのようすはどうだったのかをさぐりたいです。





# フィールドワーク

## 《橋本地区》



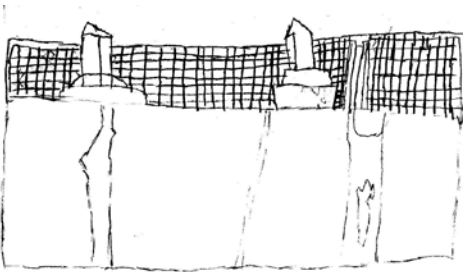
### ◎一宮なりすけの墓

〈わかったこと・気づいたこと〉  
・だまし討ちにあった「なりすけ」の亡霊を鎮めるために、大正時代地域の人々で、石碑を建てた。



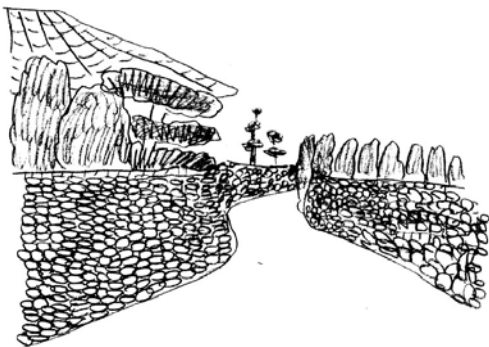
### ◎若宮神社

〈わかったこと・気づいたこと〉  
・400年前、八幡神社が銅之鳥居にうつったので、そのあと地に若宮神社が建てられた。  
・今も、力石や灯籠が残っている。



### ◎水神・山神塔・地神塔

〈わかったこと・気づいたこと〉  
・橋本地区は、昔水害がたびたびあったので、山の神様と水神様に洪水から守ってほしいと願って建てられた。  
・五角柱に神様の名前がきざまれている。



## 《夷山地区》

### ◎石塀の道<sup>いしべい</sup>

〈わかったこと・気づいたこと〉

- ・くねくねしたせまい道で、石をきれいに積んだ塀が続いている。
- ・「とくしま・景観百選」に選ばれている。



### ◎庚申塔<sup>こうしんとう</sup>

〈わかったこと・気づいたこと〉

- ・徳島県には、多く見られる。
- ・昔は「庚申待」という行事があって、60年ぐらい前まで続いていた。
- ・金剛像に猿、鳥がきざまれている。



### ◎円福寺<sup>えんぷくじ</sup>

〈わかったこと・気づいたこと〉

- ・400年前に開かれた寺。はじめは河南寺と言われ橋本にあったが、300年ほど前に夷山に移り円福寺となった。

## フィールドワークをして

●町に残っている昔からある物がいっぱいあることにおどろきました。八万町の人は、昔からある物を大切にしてきたんだなあと思いました。一番興味を持ったのは、庚申塔です。金剛像の周りに月、太陽、さる、鳥がきざまれているのはなぜだろうと思いました。

●わたしたちがすんでいる校区には、昔からお寺や神社がたくさんありました。石堀の道、よく通る道、それからあまり知らないところ、たくさんの場所を4年生全員で歩きました。八万町は、昔を伝えるたくさんのものがあるいい場所なんだなと思いました。

●博物館の先生たちといろいろな場所を歩きました。その中でも、一番すごいなあと思ったのは「庚申塔」です。江戸時代の中ごろにできたと知って「そんなにも大昔からあったなんて・・・」と、とてもびっくりしました。さるや鳥は庚申塔になんの関係があるのかな。このフィールドワークに行ってから、とても町の歴史に興味を持ちました。もっと調べていきたいです。

●八万町のことを調べて、昔を伝えるものが残っているんだなと思いました。一つ一つの神様にいろんな意味があるということがわかりました。円福寺は、最初は河南寺という名前で401年前に建てられたと聞いて、そんなに昔からあるんだとびっくりしました。石堀の道は、せまくて、くねくねしていて、迷路みたいでした。ほかにも、いろいろなことを初めて知りました。

これからも、八万町の昔を大切にしていきたいと思いました。

●八万町の昔をさぐるうでわかったことがありました。それは、「庚申塔」の中に像がきざまれていることです。像の上には月と太陽で、下にはさると鳥がきざま

れていました。今まで、何回も見ていたのにあんな絵がきざまれているとは、すごくびっくりしました。



●いつも通っている道は昔だらけということがわかりました。円福寺で、不思議や疑問をいっぱいもっていると、住職さんがいろいろ教えてくださったので「あっそうか。」と思いました。次の休みの日にひとりで調べてみたくなりました。

●戦国時代には、えびす山の頂上に、お城があったとは知りませんでした。八万町にはいろいろな石ひがあるのがわかりました。

### 小学生の作った八万町の昔クイズ

Q1 橋本にある、「おじいさん」の塔はどんな形をしているでしょう。

- A. 五角柱 B. 三角柱 C. 立方体 D. 球

Q2 水神・山神の塔では、どの季節にお祭りが開かれるでしょう。

- A. 夏と冬 B. 春と夏 C. 春と秋 D. 秋と冬

Q3 若宮神社がある場所の400年前までは何神社がまつられていたでしょう。

- A. えびす神社 B. 八幡神社 C. こんぴら神社 D. 王子神社

Q4 若宮神社にある大きな石はどんなことに使っていたのでしょうか。

- A. つけもの B. 神社の飾り C. 力くらべ D. 踏み台

Q5 庚申塔の金剛像の上にきざまれている天体は何でしょう。

- A. 太陽と月    B. 月と星    C. 太陽と星  
D. 土星と木星

Q6 庚申塔の金剛像の下にきざまれている動物は何でしょう。

- A. 犬とネズミ    B. へびと牛    C. 羊と馬  
D. さると鳥

Q7 庚申の日の夜は、眠ってはいけないと言われていました。なぜでしょう。

- A. 年に一度みんなで集まる日だから  
B. 寝ている間におなかの虫がぬけ出して神様に悪事を報告に行くから  
C. 眠るとかみなり様におへそを取られるから  
D. さるに変身してしまうから

Q8 円福寺にある大きな赤い像で口を開いているのは、何を表しているのでしょうか。

- A. 歌を歌っている    B. 生まれたことを表している  
C. あくびをしている    D. さげんでいる

Q9 円福寺は、今から何年前に建てられたのでしょうか。

- A. 101年前    B. 201年前    C. 301年前  
D. 401年前

Q10 「一宮なりすけ」のはかと言われている石ひは、だましうちにされた「なりすけ」のぼうれいをしずめるために建てられたと言われていますが、何時代に建てられたでしょう。

- A. 江戸    B. 明治    C. 大正    D. 昭和

★クイズの答え

- Q1…A    Q2…C    Q3…B    Q4…C    Q5…A  
Q6…D    Q7…B    Q8…B    Q9…D    Q10…C

## 2) 八万小学校4年生の八万町探訪

1 昔から伝わる年中行事や史跡、町の昔と今の写真をもとに、  
昔の地域の様子について調べる意欲をもつ（1時間）

写真・地図・資料を提示する（百年史・航空写真・3年生で作成した絵地図等※いずれも八万小学校蔵）

3年生の時に作成した地域探検マップを見てみよう！どんなものが自分たちの地域にあるのかな？

◎航空写真で昔と最近を見比べて

- ・昔と比べて都会になった。
- ・家がすごく増えた。
- ・畑や田んぼが減った。

◎昔の絵地図を見て

- ・僕の家近くに竹林院がある。
- ・ため池も昔と同じだ。
- ・川が大きい。
- ・川の幅が広い。
- ・土地が少ない。
- ・昔のことを知るとおもしろいなあ。
- ・もっと調べてみたいなあ。



昭和 25 年の航空写真



昭和 30 年の航空写真

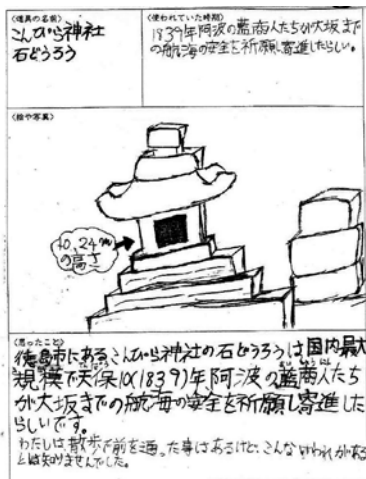


昭和 60 年頃の航空写真

## 2 地域や家に残る昔のものについて調べる。(1時間)

調べてきたことを発表しあう。

- ・家には黒電話があったよ。
- ・おとうさんがレコードを見せてくれた。
- ・納屋にチャンネルのあるテレビがあったよ。
- ・学校の資料室で、せんぼき、アンカ、糸ぐるまをみたよ。
- ・うちには七輪しちりんがあったよ。



※児童のワークシートより

## 3 地域に残る古い建物や記念碑などを調べ、昔の人々の願いについて考える。(2時間)

実際に見学する。博物館の磯本先生の案内で。





#### 4 見学したことからわかったことを発表しあう。(1時間)

- ・みんな知らないことばかりでびっくりした。
- ・庚申塔こうしんとうに猿が3匹かかっているのがとても不思議だった。
- ・七社神社しちしゃじんじやなのになぜ八つの神様をまつっているのか不思議だった。
- ・校区にこんなにたくさんの史跡しせきがあるなんて知らなかった。

#### 5 「もっとくわしく博物館の先生(磯本先生)から話を聞こう」(2時間)



写真を見ながら話を聞く



3択クイズ

#### 6 地域に残るすばらしい先人の功績や文化遺産をみんなに知らせる。

##### (1) まとめの計画を立てよう。(3時間)

- ・新聞、ポスター、カルタ、地図、クイズなどを作りたいな。
- ・できたら廊下や掲示板にはってみんなに知らせよう。



## (2) 発表会をしよう。(2時間)

発表会をしてみんなに知らせよう。

### 学習後の感想

- ・自分たちの住んでいるところに歴史があることがわかった。
- ・残っているものを大切にしたいと思った。
- ・できればもっと自分で調べてみたい。



上：新聞  
左下：ポスター  
右下：カルタ



## 2 エリア別ガイド

エリア別ガイドでは、現在の徳島市八万町域を A から F までの 6 エリアに区分しました。これは、2、3 時間程度の歴史散歩に適した範囲ということ considering して本書独自に設定したものです。それぞれ、以下の地域ごとに区分しています。

- A エリア うちま えびすやま おおつぼ しもちどり ちどり はしもと ぼぼやま  
内浜・夷山・大坪・下千鳥・千鳥・橋本・馬場山  
みやのたに しもふくまん  
宮ノ谷・下福万の一部
- B エリア はしきた ほっけ ほっけだに むこうてらやま  
橋北・法花・法花谷・向寺山
- C エリア かみながたに しもながたに しんがい てらやま ひがしやま  
上長谷・下長谷・新貝・寺山・東山
- D エリア かきたに かきたにやま かみふくまん しもふくまん ふくまんやま  
柿谷・柿谷山・上福万・下福万・福万山
- E エリア なかつうら なかつやま  
中津浦・中津山
- F エリア いぬやま おおの おきずか かわみなみ にじょう  
犬山・大野・沖須賀・川南・式丈

※園瀬川沿いに見られる石造物は B エリアでまとめました。

※上記以外にも本文中では市原<sup>いちほら</sup>、見立<sup>みたち</sup>、銅之鳥居<sup>かねのとりい</sup>、馬場<sup>ばば</sup>、北地<sup>きたじ</sup>（A エリア）、福万谷<sup>ふくまんだに</sup>（D エリア）など、現在の実地の地名ではありませんが慣例として使用される地名、町内会名も記載しています。

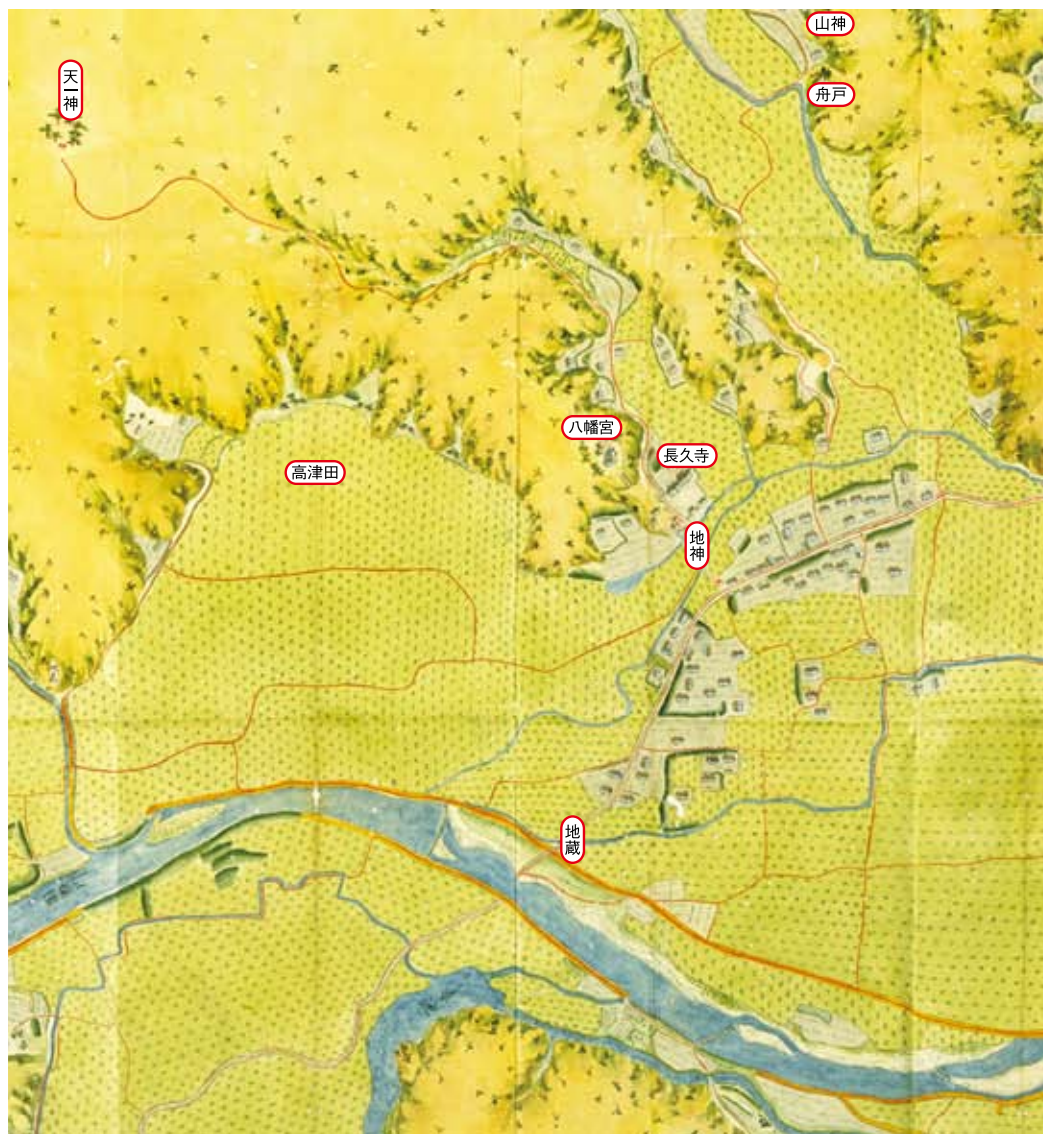
エリア別に各地区にある民間信仰にかかわる石造物、寺社、伝説、史跡等を、写真をまじえて紹介しています。また、エリアごとの現在の略図と、文化5（1808）年につくられた『名東郡下八万村分間絵図』<sup>みょうとうぐんしもはちまんむらぶげんえず</sup>（徳島県立図書館蔵）のエリア別該当箇所をそれぞれ掲載しています。現在の地図と比較しながらの歴史散歩にもご活用ください。

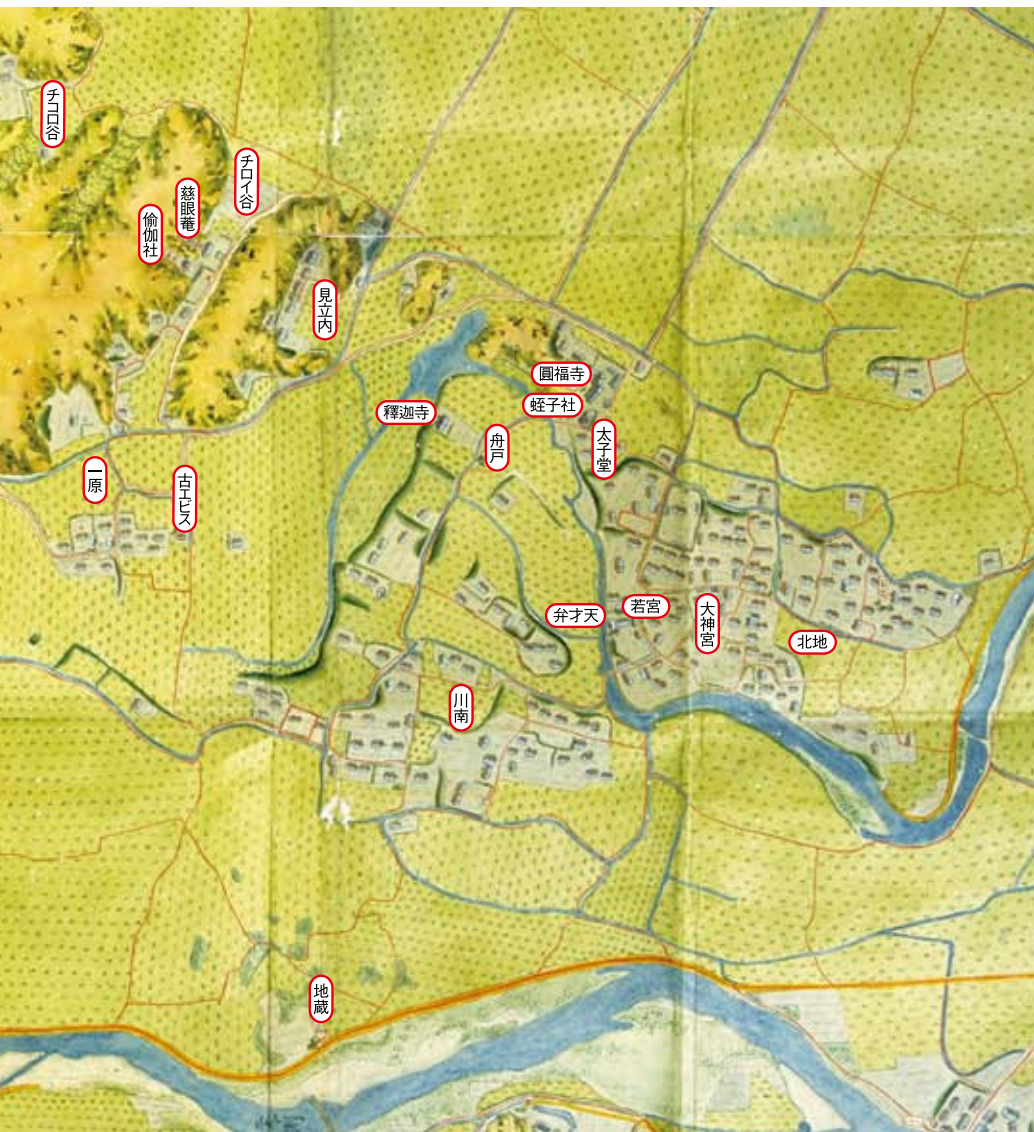
なお、エリアによっては紙幅の都合で割愛せざるをえなかったポイントがありますことをご了承ください。

# A

## エリア — 絵図 —

(内浜・夷山・大坪・下千鳥・千鳥・橋本・馬場山・宮ノ谷・下福万の一部)





# A

## エリア — 現在 —

(内浜・夷山・大坪・下千鳥・千鳥・橋本・馬場山・宮ノ谷・下福万の一部)





- |                |                  |
|----------------|------------------|
| A ① = 八幡神社     | A ⑩ = 古蛭子と元蛭子    |
| A ② = 銅之鳥居     | A ⑪ = 篠原祠と屋敷神    |
| A ③ = 長久寺      | A ⑫ = 庚申堂        |
| A ④ = 銅之鳥居の堂   | A ⑬ = 石堀の道       |
| A ⑤ = 日出神社・農神社 | A ⑭ = 地神塔と水神・山神塔 |
| A ⑥ = 天一神社     | A ⑮ = 若宮神社（橋本）   |
| A ⑦ = 義林庵跡     | A ⑯ = 若宮神社（夷山）   |
| A ⑧ = 釈迦庵跡     | A ⑰ = 阿弥陀庵       |
| A ⑨ = 円福寺      | A ⑱ = 妙見庵跡       |

①八幡神社 — 八万町の旧郷社 — (宮ノ谷)

旧下八万村の郷社として馬場山に<sup>ぼばやま</sup>金比羅大権現<sup>こんびらだいこんげん</sup>をたて祀るようになり、後に橋本名<sup>みょう</sup>の「神ノ氣」付近にあった八幡神社を八幡大菩薩<sup>はちまんだいぼさつ</sup>として同じく馬場山の楠<sup>くすのき</sup>の大樹<sup>たいじゆ</sup>下にうつし祀るようになりました。これが慶長年間(1596～1615年)とされ、後に現在の場所に遷宮<sup>せんぐう</sup>されたと伝えられていますが、確かなことはわかっていません。明治はじめには長久寺<sup>かんかつ</sup>によって管轄されていましたが、神仏分離後、明治3(1870)年から八幡神社と呼ばれるようになりました。



八幡神社(宮ノ谷)



八幡神社の御旅所(大坪)

現在の八万町ばかりでなく、沖浜、沖浜町、山城町などにも<sup>うじこ</sup>氏子をもつ神社です。その鳥居<sup>とりい</sup>に特色があり、「銅之鳥居<sup>べつしやう</sup>」という別称もあります。

A エリアにある地神塔

このA エリアには、全部で5地区の地神塔があります。銅之鳥居、市原、見立、橋本、夷山の地神塔です。この内、銅之鳥居の地神塔については『名東郡下八万村分間絵図』でも確認でき、少なくとも文化5(1808)年頃には実存していたことがわかります。

新しいものでは、市原地区(蛭子神社境内)の「大正七(1918)年」の紀年銘が確認できるものがあります。また、夷山の地神塔には玉垣が設けられ、そのわきに明治42(1909)年にたてられた碑があります。「日清戦捷記念」として明治29(1896)年に北地(現夷山)の地神塔がたてられたこと、「稲米豊穰」を祈念するものだということなどが記録されています。



②銅之鳥居 — 銅板を巻いた両部鳥居 —

〔宮ノ谷〕 銅之鳥居とは、八幡神社前にある両部鳥居のことをいいます。現在では八幡神社の別称や周辺地区名にもなっています。その名のとおり、ヒノキの柱に銅板を巻き付けた構造であるため、そのような別称がついたとされます。八幡神社を橋本名よりうつしたころ、蜂須賀家によって建造されたと伝えられています。



八幡神社の銅之鳥居（宮ノ谷）

③長久寺 — かつての八幡神社の別当 —

〔宮ノ谷〕 宮ノ谷にある真言宗の松樹山長久寺は、永禄年間（1558～1570年）に僧道珍によって開かれたと伝えられます。その後元禄年間（1688～1704年）に現在の場所にうつり、長久寺と寺号を改めました。明治はじめまでは八幡神社の別当でもありました。



長久寺（宮ノ谷）

④銅之鳥居の堂 — 集められた石造物の堂 —

〔宮ノ谷〕 八幡神社参道に地神塔があります。さらにその奥には庚申塔、地蔵、大師像や板碑が集められ、祀られている堂があります。ここに祀られる庚申塔は「元禄三庚午（1690）年十二月四日」の刻字もあり、八万町内でも比較的古い庚申塔です。



銅之鳥居の堂（宮ノ谷）

⑤日出神社・農神社〔馬場山〕 八幡神社から山道を登ったところに小祠があります。日出神社は流行病の神として、農神社は農業の神として祀られています。『名東郡下八万村分間絵図』では日出神社や農神社の記載は確認できません。



日出神社〔馬場山〕

⑥天一神社 — 山上の神社 — 〔馬場山〕 祭神は天之御中主命。「元禄二（1689）年御幣の飛びて、現在の馬場、長谷の中間に聳ゆる馬場山の頂上に留まれしにより其處に社を建て、奉祀したりと傳ふ。」（『八万村史』269頁）これは天一神社の遷宮に関する伝承を



天一神社の鳥居〔馬場山〕

記述した一節です。現在の小松島市坂野からこの地にうつされてきたとされます。現在、馬場山の山頂（銅之鳥居からは約800m）のところに祀られています。

長谷、銅之鳥居、市原、見立、中津浦、橋本、夷山、法花、八万団地など八万町内各地区に氏子が多く、ほかに鳴門市、小松島市、阿南市などからも信者を集めています。

⑦義林庵跡〔夷山〕 見立地区に尼庵としてたてられ、明治はじめころに廃庵になりました。修験者がいたと伝えられます。『名東郡下八万村分間絵図』では義林庵の所在は確認できませんが、見立地区の地神塔付近にあった



義林庵跡付近にある地神塔〔夷山〕

と考えられています。

⑧ 釈迦庵跡〔橋本〕 夷山池畔にあつ

た堂で、『名東郡下八万村分間絵図』でも「釋迦寺」として記されています。昭和10（1935）年頃には無住になり、現在は廢庵になっています。



釈迦庵跡〔橋本〕

この付近にあった墓石などの多くは円福寺裏の墓地へうつされ、今は宝篋印塔などを残すのみです。なお、円福寺裏の墓地付近には、移転を余儀なくされた五輪塔、地藏、供養塔など多くの石造物が八万町各地から集められています。

⑨ 円福寺 — 夷山城跡に位置する寺院 —

〔夷山〕 夷山地区にある真言宗の龍宝山円福寺は、八万町内でも多くの檀家がある寺院です。本尊は、阿弥陀三尊像。慶長12（1607）年に僧宥尊により開かれた旧河南寺（現

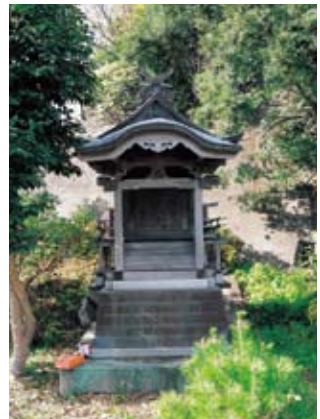


円福寺〔夷山〕

橋本地区付近)を、元禄7（1694）年に夷山城跡にあたる現在の場所に移したという記述があります（『八万村史』280頁）。阿波秩父三十三番札所、徳島七福神一番札所にもなっていますし、境内奥には元蛭子とも称される蛭子社が祀られています。

⑩ 古蛭子と元蛭子 — 市の伝承と2つの蛭子 —

〔下福万・夷山〕 円福寺の境内の片隅に、蛭子神社が祀られています。また、市原地区の集会所も



蛭子神社（元蛭子・夷山円福寺境内）

蛭子神社と呼ばれています。前者が元蛭子、後者が古蛭子と称されるもので、それぞれ『名東郡下八万村分間絵図』にも記載きざいされています。「古エビス」は、現在の市原地区の蛭子神社よりやや南にあったようです。毎年この付近で市が開かれていたとも伝えられます。この古蛭子を、戦国時代の夷山城主篠原佐吉兵衛が城館じょうかんに鎮守ちんじゆとして祀ったのが元蛭子とされます。



蛭子神社（古蛭子）〔下福万〕

その後、城館跡地の現在の位置にうつった円福寺により管理され、1月10日の縁日えんにちには多くの参拝者さんぱいしやを集めていました。明治5（1872）年に徳島市とおりまち通町の事代主神社にうつされ、縁日もなくなったといひます。

⑪ 篠原祠と屋敷神 — 武将の伝説の

残る屋敷神 — 〔夷山〕 夷山城主

篠原佐吉兵衛が永禄3（1560）年  
三好義賢みよしよしかたに従って戦った泉州せんしゅう（現在の大阪府）での戦いで敗れ、自害した後、その家臣かしんにより遺髪いはつうを埋めて祀ったのがこの祠だとされています

（『八万村史』275頁）。（資料編：「祀られる武将の祠」参照）。この祠は現在、鈴酒家の屋敷神として祀られているものです。

このほかにも、夷山の各家では鈴酒家同様に若宮さん、鎮守さんなどと呼ばれる屋敷神を祀っています。その



篠原祠〔夷山〕



屋敷神祭り〔夷山〕

中にはこの地で死んだ武将を祀ったと伝えられる祠を、イトウ（本・分家関係にある同族団等）や各家で祀る例もあり、神職による祭祀が行われています。

⑫<sup>こうしん</sup>庚申堂〔夷山〕 庚申堂の中央にあるのが庚申塔です。青面金剛像が彫られ、像の上には月と太陽、像の下に<sup>ざる にわとり</sup>猿と鶏が刻まれています。このほか造立年を示す紀年銘として「<sup>きねんめい</sup>宝曆七<sup>ほうれき</sup>丁<sup>ていちゆう</sup>丑（1757）年十月朔日<sup>ついたち</sup>」の刻字があります。



庚申堂〔夷山〕

⑬<sup>いしべい</sup>石塀の道 — 集村集落の道 — 〔夷山〕 夷山地区などでは、高い石塀を設けている家が多くあります。もともとは洪水対策として積み上げられた石垣と石塀<sup>いしがき</sup>ですが、古い集村集落の狭く曲がりくねった道沿いは、写真のような不思議な風景が見られます。



石塀の道〔夷山〕

⑭<sup>じしんとう</sup>地神塔と水神・山神塔 — ならぶ2つの五角柱の石塔 — 〔橋本〕 橋本地区の地神塔は、基壇に五角柱の石塔が2基たてられています。1つは、地神塔で、もう一方に「南無水神」「南無山神」という刻字が見られ、水神と山の神が祀られています。紀年銘も確認でき、<sup>ぶんか</sup>文化12（1815）年につくられたことがわかります。（資料編：「山の神信仰」、「水神信仰」、「地神信仰と社日」参照）。



地神塔と水神・山神塔〔橋本〕

⑮**若宮神社** — 若者が集った神社 — **〔橋本〕** 橋本地区で祀られる神社です。<sup>けいちよう</sup>慶長年間(1596～1615年)、八幡神社が現在の場所にうつされる以前は、この付近にあったという伝承があります。かつて、秋の<sup>てんしよう</sup>宵祭りの夜、境内で祭り相撲<sup>すもう もよお</sup>を催していたほか、「文政五(1822)年」の紀年銘のある石灯籠<sup>とうろう</sup>や、いくつもの力石<sup>ちからいし</sup>が本殿裏に残されています。



若宮神社〔橋本〕

⑯**若宮神社** — もどってきた地区の神社 — **〔夷山〕** <sup>さるとひこ</sup>猿田彦を主神とする夷山の神社です。同地区の集会所と同棟に祀られています。明治期以降、八幡神社に合祀<sup>ごうし</sup>されていましたが、昭和53(1978)年にここに<sup>まつ</sup>戻して祀られるようになりました。



若宮神社〔夷山〕

⑰<sup>あみだ</sup>**阿弥陀庵** — 無住になった<sup>あん</sup>庵と墓地 —

**〔夷山〕** 本尊は阿弥陀如来。「百余年前の開基と伝えらる」(『八万村史』287頁)とされることから、少なくとも江戸時代後期にはつくられたと考えられます。かつては、<sup>えんぶくじまつじ</sup>円福寺末寺として尼僧の住む庵でしたが、現在は夷山地区の住民を中心に<sup>しんこう</sup>信仰され境内にある墓域とともに管理されています。



阿弥陀庵〔夷山〕

⑱ <sup>みょうけんあん</sup>妙見庵跡 — 残される洪水の供養塔 — 【内浜】 内浜にある妙見庵跡は、『名東郡下八万村分間絵図』では、「妙見社」「法花菴」と記されています。本尊は <sup>しゃかによらい</sup>釈迦如来です。

妙見庵には、大きな2基の <sup>せきとう</sup>石塔があります。 <sup>てんめい</sup>天明元（1781）年に <sup>にちれんしょうにん おんぎ</sup>日蓮上人の遠忌にちなんでたてられた「<sup>なむにちれんだいぼさつ</sup>南無日蓮大菩薩」と刻まれたものが北側にたてられています。また <sup>かえい</sup>嘉永7（1854）年にたてられた南側の石塔は、一字一石の <sup>きょうもん う</sup>経文を埋めた上にたてられたとされ、「<sup>そのせがわ ほんらん</sup>園瀬川の氾濫により、人畜多数流されて <sup>らくめい</sup>落命せるに <sup>よ</sup>依り <sup>そのくよう ため</sup>其供養の爲」（『八万村史』288頁）にたてられた供養塔です。



妙見庵跡の供養塔【内浜】

### 『名東郡下八万村分間絵図』でみる A エリア

A エリアすべての石造物や史跡などを1つ1つ紹介できないので、ここでまとめて『名東郡下八万村分間絵図』のA エリア付近を見てみましょう。

現在の夷山付近ですと円福寺の南側に「舟戸」さらに南に「弁才天」、南東に「太子堂」の記載があります。また、集落内にも「若宮」と「大神宮」が書かれています。これらは、すでに現存しないものや特定できないものですが、この絵図が <sup>へんざん</sup>編纂された時には、こうした小祠がいたるところにあったということがわかります。

このほか、「北地」「川南」と記される夷山と川南（F エリアを含む）付近、八幡神社や長久寺付近の街道沿いに集落が集中しています。現在の <sup>おおひら</sup>大坪、<sup>ちとりの</sup>千鳥、<sup>うちなべ</sup>内浜、<sup>はしもと</sup>橋本付近には大きな集落はなく、水田が広がっていたことがわかります。

# B

## エリア — 絵図 —

(橋北・法花・法花谷・向寺山)







# B

## エリア — 現在 —

(橋北・法花・法花谷・向寺山)





①延生軒えんじょうけん — 江戸時代の景勝地 — 〔向寺山〕 現在の文化の森総合公園付近にあった延生軒は、庄野和泉守しょうのいずみのかみの居所だったところに、江戸時代蜂須賀家はちすかけかろう家老の長谷川氏が代々別荘を経営したところへんがくです。「延生軒」の遍額は、中津浦にある竹林院ちくりんいんの開山鉄崖てつがいによるものでした。四季の名樹の花が咲く、江戸時代の景勝地でした（『八万村史』 324頁）。



王子神社（向寺山）

②王子神社おうじじんじや — 八万町の第三王子神社 —

〔向寺山〕 王子神社の祭神は、天津日子根命あまつひこねのみことで当地の根子神（土着神）として祀られ、社殿奥は御陵ごりょうとなっています。（『八万村史』 274～275頁）王子神社は長谷川氏の鎮守で横に猫神様が祀られています。

③法華庵ほっけあん（日蓮庵） — 法花の地名由来 — 〔法花谷〕

鎌倉時代に法花谷の地に建てられた法華寺が、法花や法花谷の地名由来になったとされます。延宝5（1677）年の検地帳には「ほっけい谷」の記載きさいがあります（『八万村史』 14頁）。

法花谷の山腹みやうえいしにあり、妙永寺（徳島市寺町）の末庵で「明治十二、三年頃、其説教所として庵堂建つ。」（『八万村史』 291頁）と記述があります。



法華庵跡・宝塔（法花谷）

山頂には、明治20（1887）年建立の「南無妙法蓮華經」と刻まれた宝塔ほうとうがあります。かつて半ば地中に埋まった自然石なかがあり、知らずにこれに上ったり触れたりすると腹痛を起こし、あるいは昏倒こんとうするとされています。明治10（1877）年に掘り起こした際には、石棺せつがん、刀剣とうけん、土器数点、「南無妙法蓮華經」と刻んだ石たたが出てきました。祟りおそを恐れ、これらと一字一石の経を埋めたのが、現在

宝塔（<sup>きょうづか</sup>経塚）として残されています（『八万村史』340～341頁）。

④Bエリアの地神塔 法花谷は、法花谷公民館（集会所）の敷地内に、法花は法花小橋の近く（<sup>じょうやとう</sup>常夜灯、<sup>のぼり</sup>幟立て、<sup>ちようずばち</sup>手水鉢とともに祀られています。法花の地神塔は法花大橋ができるまでは、橋北詰にあった交番付近にありました。八万コミュニティセンターの近くの法花傍示にも、地神塔が祀られています。



辻の不動明王と薬師如来（法花谷）

⑤辻の不動明王、薬師尊、六地藏

— 辻の祀り場1 — 【法花谷】 この辻付近は「<sup>とうろう</sup>灯笼の端」と呼ばれ、常夜燈の脇に不動明王と薬師如来があります。この付近では、昔「オフク」という<sup>たぬき</sup>狸が<sup>す</sup>棲んでいて、夕方になるとここを通る人を騙していたため、不動明王を祀ったところ、出なくなったといわれます。

⑥山の神 — 山と人の接するところ —

【法花谷】 法花谷の六地藏を左にし山に沿って登っていくと、<sup>いしづみ</sup>石積の<sup>ほこら</sup>祠があり山の神が祀られるほか、「紀譽太萬命」と刻まれた板状碑もあります。そのほか、付近の畑の中にも山の神が祀られ



山の神（法花谷）



辻の馬頭観音ほか（法花谷）

ています。山持ちの人は、大野の人に<sup>まきやま</sup>薪山として<sup>たちぎ</sup>立木の<sup>さいしゆけん</sup>採取権を売ったこともありました。

⑦辻の馬頭観音ほか — 辻の祀り場2 —

【法花谷】 <sup>さんまいあん</sup>三昧庵への入り口でもある道の辻には、<sup>ばとうかんのん</sup>馬頭観音、<sup>ふどうみようおう</sup>不動明王像、

じぞう だいし  
地蔵、大師像がたてられています。馬頭観音は明治40（1907）年に、地蔵は慶応3（1867）年にたてられたものです。



三昧庵の普賢菩薩ほか9体の仏像〔法花谷〕

⑧三昧庵と墓地 — 刀工も眠るムラの墓地 —  
〔法花谷〕 円福寺末庵で、普賢菩薩ほか9体の仏像を祀っています。庵の向かいには高王経塔、光明真言供養塔などがあります。高王経塔は、天保2（1831）年に「内西船場町」の「今津屋藤兵衛」が「家運長久」を願ってこの地にたてたもの、光明真言供養塔は明治33（1900）年に法花、法花谷の人々によってたてられたものです。



三昧庵の墓地にある安喜一族の墓〔法花谷〕

また、庵脇の山腹は墓地で、「園瀬鍛冶」として知られた刀工安喜一族の墓もあります。



天満神社・大鳥居〔法花谷〕

⑨天満神社 — 写し霊場のある神社 —  
〔法花谷〕 大野の朝川氏邸より天神山山腹にうつされたようで、「氏子の土地数町四方には落雷なし」との託宣があつて、法花、法花谷には落雷がないとされます（『八万村史』270頁）。慶応元（1865）年の大鳥居、昭和9（1934）年の鳥居があり、昭和4（1929）年の御大典の翌年に本殿が改築されました。



天満神社にある新四国霊場〔法花谷〕

ぶんせい (1819) 年創設の新四国写し霊場が、法花谷集会所の上の山にありました。それが、天満神社参道に集められています、まだ山中に残されているものもあるそうです。(『八万村史』291頁)

⑩ 養老軒跡・大匠寺跡 — 邸宅跡と取水口 — (法花谷) 養老軒は、元禄期 (1688～

1704年) に、物頭折下角左衛門氏治が開いた別荘です。園瀬川の永田堰より水を引き入れた池には、菖蒲、杜若などが植えられていたようです。その名残を水路からうかがうことができましたが、そうした景観も環状道路の工事により大きく変わりました。



大匠寺 (佐々木賀代子氏提供・昭和60年頃) (法花谷)

この地は、明治42 (1909) 年に現在の徳島市多家良町小路地からうつつてきた大匠寺の境内となりましたが、道路工事のため平成16 (2004) 年に、もとの大匠寺跡へ移転しました。大匠寺は、丈六寺の末寺であり、蜂須賀正勝夫人の念持仏を安置し開基された寺です。



養老軒跡付近の取水口付近 (法花谷)

なお、永田堰は園瀬川に堰をつくり南岸の用水へ水を流すようにした堰で、その水は、法花谷、犬山、大野、大谷の一部の600町歩の水田を今も潤しています。



晒屋橋付近 (2000年5月) (橋北)

⑪ 晒屋橋 — 晒屋のお藤元 — (橋北) 付近で古くから晒屋が自家用に架けた橋

で、昭和33（1958）年にコンクリートの橋に架け替えられました。このころには、晒屋が河原で布を干す風景が見られました。上流にもう一軒晒屋がありました。

⑫堰板と水害 — 洪水への備え — 〔法花〕

法花小橋南詰の県道の両脇には、堰板をはめ込むようにした防災用のコンクリート壁の一部が残されています。園瀬川の南岸は洪水のときには堤がよく切れ、大野地区、方上地区、大谷地区など園瀬川南岸の各地区まで水害が及んでいました。



堰板をはめこむ溝（佐々木賀代子氏提供）〔法花〕

⑬稲荷神社 — 伏見稲荷の分社 — 〔橋北〕 祭神は倉稲魂命。

法花小橋北詰西側に明治初年に建てられた社殿があり、そこで祀られていました。京都の伏見稲荷より分霊し、ある家の鎮守として祀られていたもので、『名東郡下八万村分間絵図』でも確認することができます。現在は道路工事のため、移転され某氏の屋敷地内で祀られています。



稲荷神社（2000年5月）〔橋北〕

⑭お長屋 — 大谷屋敷に仕えた人びと — 〔法花谷〕 法花谷公民館の横にある地蔵、不動明王前を進んでいくと、地元では「お長屋」と呼ばれる家が4軒あります。明和6（1769）年に建てられた蜂須賀家の大谷屋敷に仕えていた家々です。

⑮一本松と地蔵 — 怪異の集うところ — 〔橋北〕 晒屋橋を渡った北岸、八万南小学校南の川沿いに一本松が昭和50年頃まであり、今も地蔵が祀られています。ここには、首のない馬が駆け抜けるという首なし馬の伝説があり、藁人形が打ち込まれていたこともあったといます。また、賭け事への効験もあったといます。



★園瀬川沿いにみられる石造物（<sup>ぞ</sup>地蔵 <sup>せきぞうぶつ</sup>・<sup>じぞう</sup>常夜燈 <sup>じょうやとう</sup>・<sup>ばとうかんのん</sup>馬頭観音）

本書でいう A・B・C・F エリアを流れる<sup>そのせがわ</sup>園瀬川沿いにも、多くの<sup>せきぞうぶつ</sup>石造物を確認することができます。その一部ですがここで紹介します。



園瀬橋付近の八幡神社の常夜燈〔大坪〕B ⑩



園瀬橋北詰付近の地蔵〔大坪〕B ⑪



八万南小学校南側の一本松の地蔵と堂。「川南惣講中」により祀られています。〔橋北〕B ⑮



八万南小学校南側の馬頭観音。地蔵堂脇に移転されたもの。明治 12(1879)年に法花の人により祀られたものです。〔橋北〕B ⑯



晒屋橋北詰付近の地蔵。明和 3(1766)年 9月に川南と法花講中によりつくられたもので、「右恩山寺道」の表記もみえます。〔橋北〕B ⑱



天満神社の御旅所です。慶應丁卯(1867)年建立。「川隲氏」と川の側に彫られています。〔橋北〕B ⑳

C

# エリア — 絵図 —

(上長谷・下長谷・新貝・寺山・東山)

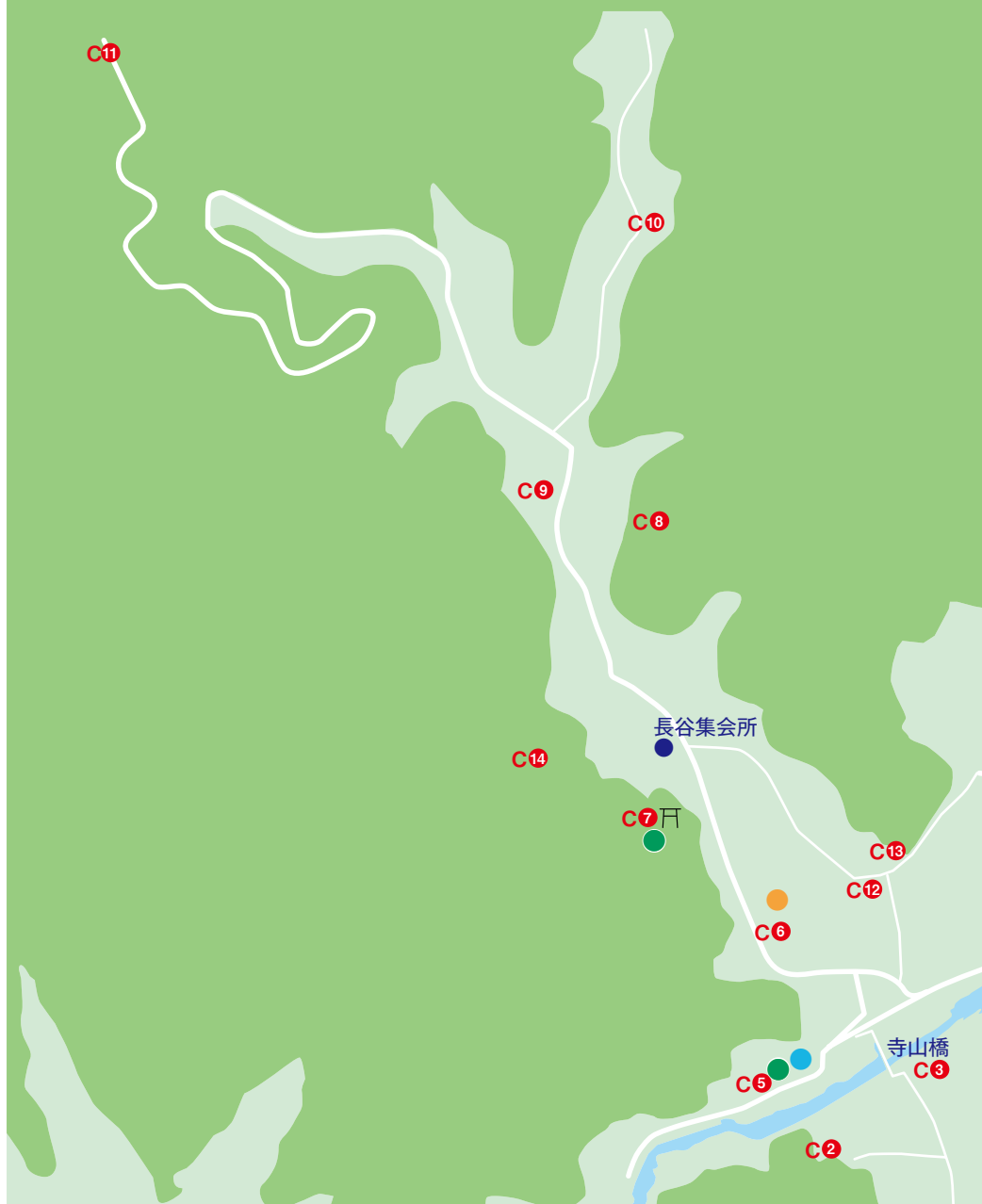


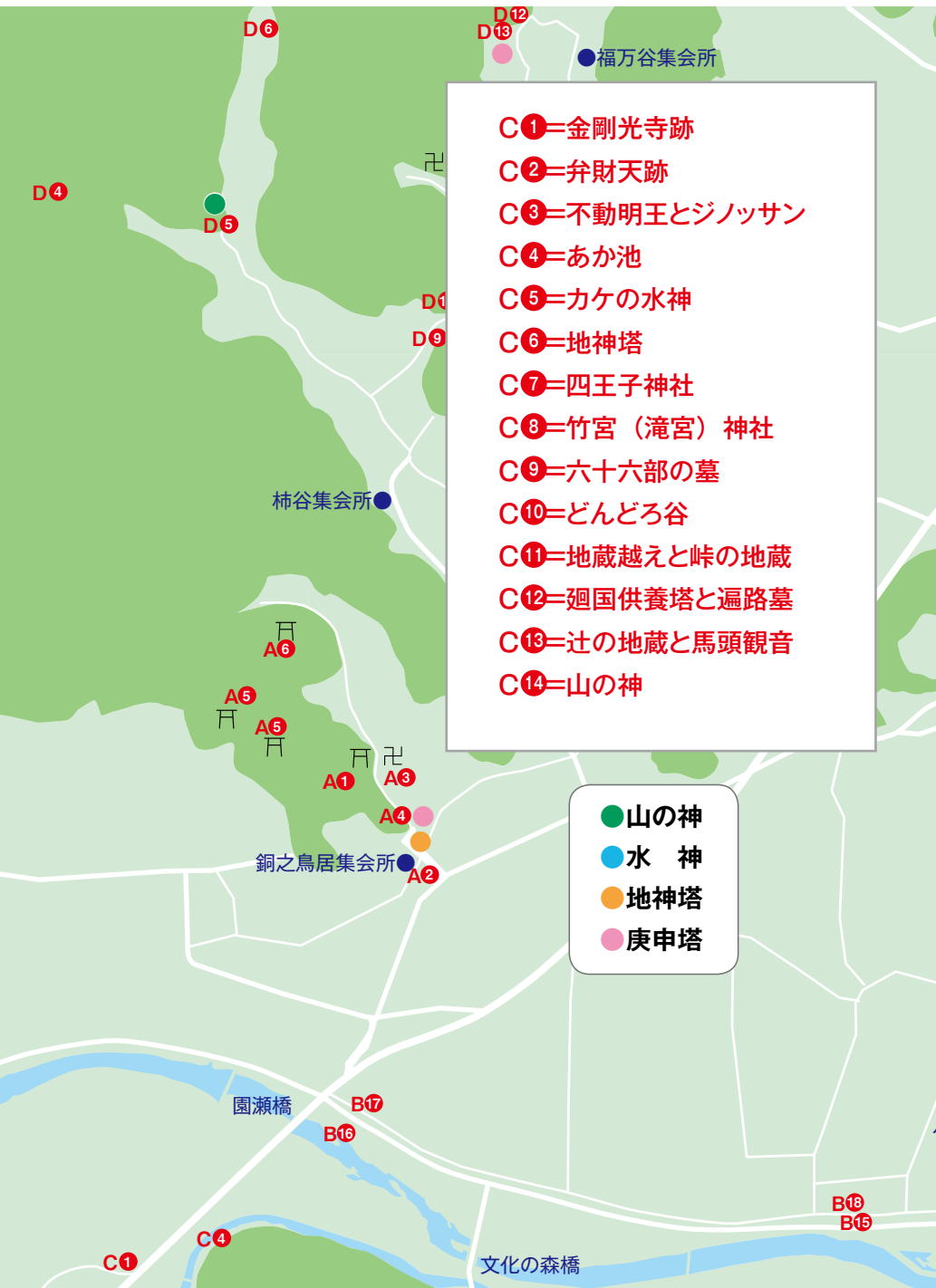


# C

## エリア — 現在 —

(上長谷・下長谷・新貝・寺山・東山)





- C①=金剛光寺跡
- C②=弁財天跡
- C③=不動明王とジノツサン
- C④=あか池
- C⑤=カケの水神
- C⑥=地神塔
- C⑦=四王子神社
- C⑧=竹宮（滝宮）神社
- C⑨=六十六部の墓
- C⑩=どんどろ谷
- C⑪=地藏越えと峠の地藏
- C⑫=廻国供養塔と遍路墓
- C⑬=辻の地藏と馬頭観音
- C⑭=山の神

- 山の神
- 水神
- 地神塔
- 庚申塔

① <sup>こんごうこうじあと</sup>金剛光寺跡 — 古代～中世の寺院跡 — **〔寺山〕** 古代～中世の寺院の跡があり、奈良時代の<sup>かわら</sup>瓦も<sup>はくつ</sup>発掘されていますが、<sup>ぶんげん</sup>文献などは残されていません。京都市の<sup>ぶじょうじ</sup>峰定寺にある<sup>ほんしやう</sup>梵鐘には、「阿波国以西郡八萬金剛光寺」「永仁四」（1296）年の<sup>めい</sup>銘があり、寺院の存在が確認できます。

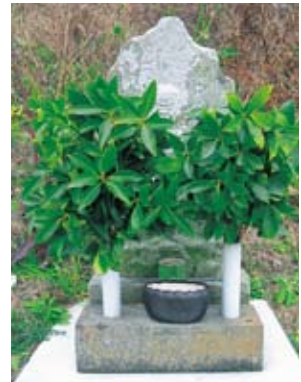
この付近の水田の名に「塔の下」「風呂の下」「仁玉田」「トウー」「大門」「六地藏」「赤池」等の名前があります。

② <sup>べんざいてん</sup>弁財天跡（金剛庵） — 古寺院の跡 —  
**〔寺山〕** <sup>かえい</sup>嘉永7（1854）年  
<sup>しいのしょうざえもん</sup>椎野庄左衛門が金剛光寺跡保存のため、寺跡に<sup>まつ</sup>弁財天を祀るが、昭和35（1960）年に火災のため焼失しました。  
<sup>えんぶくじまつあん</sup>円福寺末庵。



弁財天跡（寺山）

庵跡には、多数の石造物が残されています。  
<sup>ちやうずばち</sup>手水鉢：<sup>しょがんにようじゆ</sup>諸願成就 <sup>ほしごうちむらそうじゆう</sup>星河内村惣中 <sup>しょうとくがん</sup>正徳元辛卯  
 (1711) 八月十五日  
<sup>うちうおまち</sup>手水鉢：<sup>しょうとく</sup>内魚町講中 <sup>いつび</sup>正徳五乙未（1715）歳九月十日  
<sup>ぶんきゆう</sup>百度石：<sup>きがい</sup>文久（1863）三年癸亥五月吉日



不動明王（寺山）

③ **不動明王とジノッサン** — 水を防ぎ田を守る — **〔寺山〕**

不動明王は、園瀬川の南岸土手にあります。不動明王像右下にジノッサンがあります。「田植が済むとあられをお祀りするよう」伝えられる祠です。



ジノッサン（寺山）

④あか池（閼伽池）〔寺山〕 金剛光寺跡の庭池だったと伝えられています。この池は、昔の園瀬川の流路のひとつでした。

⑤カケの水神 — 水神と山の神 — 〔下長谷〕 祭神 みづのはめののみこと おおやまつみのみこと 罔象女命、大山祇命

『名東郡下八万村分間絵図』では「山神」と表記されています。この水神は、元禄年間(1688-1704)下長谷「風呂の下」の堤に分流を抜き、園瀬川の水で四ヶ村の用水を補うためにつくられました。その水口に祀られたのが、この水神です。



カケの水神〔下長谷〕

⑥地神塔〔下長谷〕 てんぼう 天保3（1832）年辰8月のきねんめい紀年銘があります。上下水道工事のため、地神を現在の場所へ移転させました。その際、2基あった灯籠の内の1基を四王子神社境内へうつしました。



四王子神社〔下長谷〕

⑦四王子神社 — 長谷の氏神 —

〔下長谷〕 あまてらすおおみかみ 天照大神の第4の王子を祀っています。境内にけいだい あんえい安永3（1774）年の手水鉢、ちようずばち けいおう慶応元（1865）年の銘のあるこまいぬ狛犬が1対あります。本殿には、山の神もまつ祀られています。そのほか、現在は行われていませんが、7種類の神踊り歌も伝えられています。



竹宮（滝宮）神社〔下長谷〕

⑧竹宮（滝宮）神社 — 祀られる雷神 —〔下長谷〕 祭神は建御雷神たけみかづちのかみが祀られています。戦時中には武運長久を願い、たくさんの参拝者が訪れました。



六十六部の墓〔上長谷〕

⑨六十六部の墓 — この地を訪れた行者ぎょうじやの足跡 —〔上長谷〕 各国六十六カ所霊場めくを巡る行者を六十六部または六部と呼びます。各国を行脚あんぎやする行者が、この地で亡くなったときにたてられたと考えられます。「亡くなる時、祀まつってくれたら目とか足を治してあげる」との行者の言葉から、現在も盆と正月にお供えをして祀られています。墓碑には「信濃国六十六部 阿野作エ門之墓」と記されています。



峠の地蔵〔上長谷〕

なお、この六十六部の墓は、個人宅で祀られているため、近くで見えることはできません。

⑩どんどろ谷 — 長谷川の支流を昇ると —

〔上長谷〕 今は杉林になっていますが、江戸時代には隠し田かくだがあり、昭和30年代半ばまではおいしい米がとれていました。長谷川上流では、昭和30年代にはマンガン鉱さいくつが採掘され、園瀬川を利用して搬出はんしゆつされていました。



廻国供養塔〔下長谷〕

⑪地蔵越えと峠の地蔵 — 名東方面へ越える峠道 —

〔上長谷〕 地蔵越えの峠道には、上鮎喰と長谷の講中により、天保2（1831）年につくられた地蔵があります。江戸時代一般の人の採取が禁じられた「お留



め石」もあります。この峠は、戦時中には軍事演習にも使われました。

⑫廻国供養塔と遍路墓 — この地を訪れた行者の足跡 — 〔下長谷〕 長谷から新貝へ向かう三叉路の川沿いにあります。行者に結縁したことを記念して立てられた廻国供養塔が、半分土に埋まった状態であります。明和5 (1768) 年に、長谷と「讃州高松」のある村とが関係してたてられたもののようです。その脇には、遍路墓と無縁墓が3基あります。遍路墓は天明8 (1788) 年のもので、「備中国小田郡」とかかわりのある人のもののようです。

⑬辻の地蔵と馬頭観音 — 馬の道・馬の供養 — 〔東山〕 道の辻の盛り土の上に、地蔵2基と馬頭観音9基が祀られています。馬頭観音は江戸時代末から明治時代にかけて、長谷の人々によってたてられたものです。この前を街道が通り、ここで馬の爪を切ったり、蹄鉄を替えたりしていたといわれています。



辻の地蔵と馬頭観音 (東山)

⑭山の神 — 長谷の山の守りと願い — 上長谷の3軒で祀る山の神、中と下の3軒で祀る山の神、1軒で祀る山の神など7基を確認しました。この中で、出屋敷によって下の現在の屋敷地内に降ろしたものもあります。また、上長谷の右側の中央に「お霊さん」といわれている小祠があります。一説には、一宮城の姫君を祀ったものともいわれます。(資料編：「山の神信仰」参照)

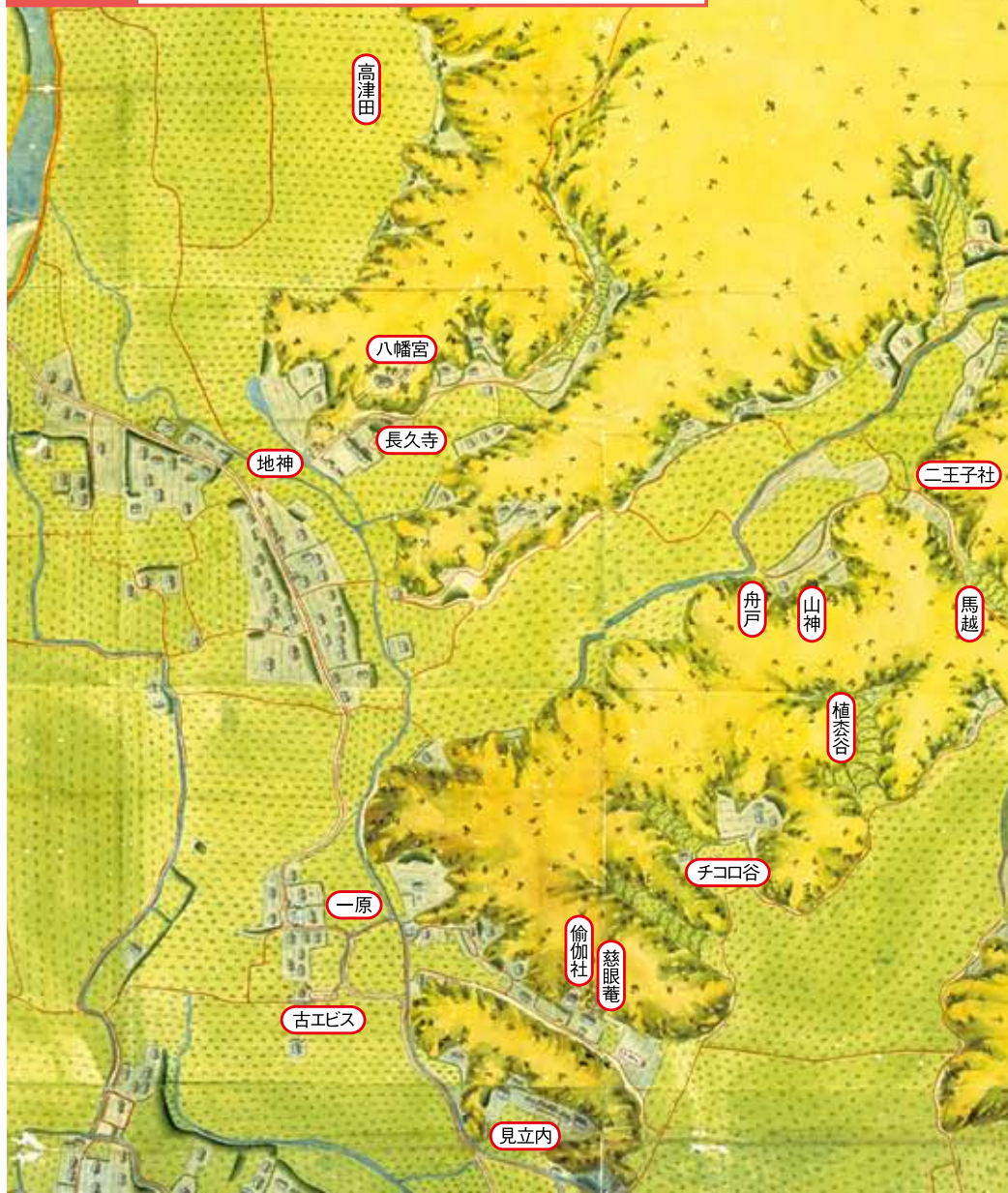
#### 長谷の正月飾りづくり

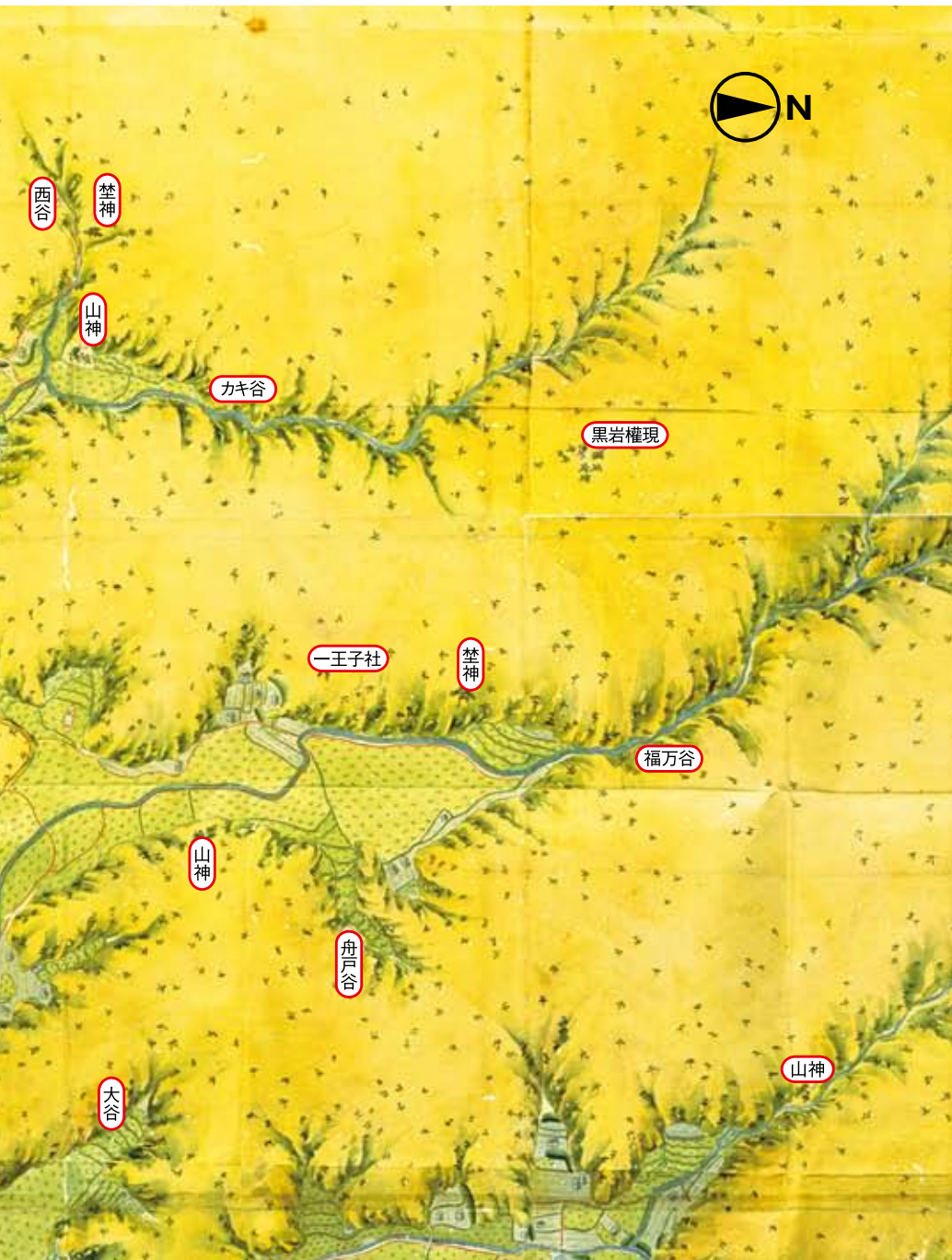
昭和60年頃まで長谷地区の人々はお正月のお飾りをリヤカーに積み新町、佐古地区まで行商していました。船が着く所では他より高く買ってくれて、正月へ向けて貴重な現金収入になったそうです。

D

# エリア — 絵図 —

(柿谷・柿谷山・上福万・下福万・福万山)





# D

## エリア — 現在 —

(柿谷・柿谷山・上福万・下福万・福万山)

- D①=六地藏
- D②=中山家の祠
- D③=中山家のオフナタサン
- D④=農神社
- D⑤=山神社
- D⑥=溜池の水神さん
- D⑦=沢の水神さん
- D⑧=馬越
- D⑨=地神塔
- D⑩=峠の地藏
- D⑪=清涼寺
- D⑫=一王子神社
- D⑬=庚申塔
- D⑭=黒岩神社
- D⑮=牛の絵の石塔
- D⑯=福万谷地区の水神さん
- D⑰=福万谷地区の溜池と  
長宗我部越
- D⑱=地神塔・オフナタサン  
山神社
- D⑲=山口家の祠
- D⑳=ユウガサン（慈眼庵）  
と切支丹灯籠

●山の神

●水神

●地神塔

●庚申塔

戸  
D⑭

D⑦

D⑥

D④

D⑤

柿谷集会所

戸  
A⑥

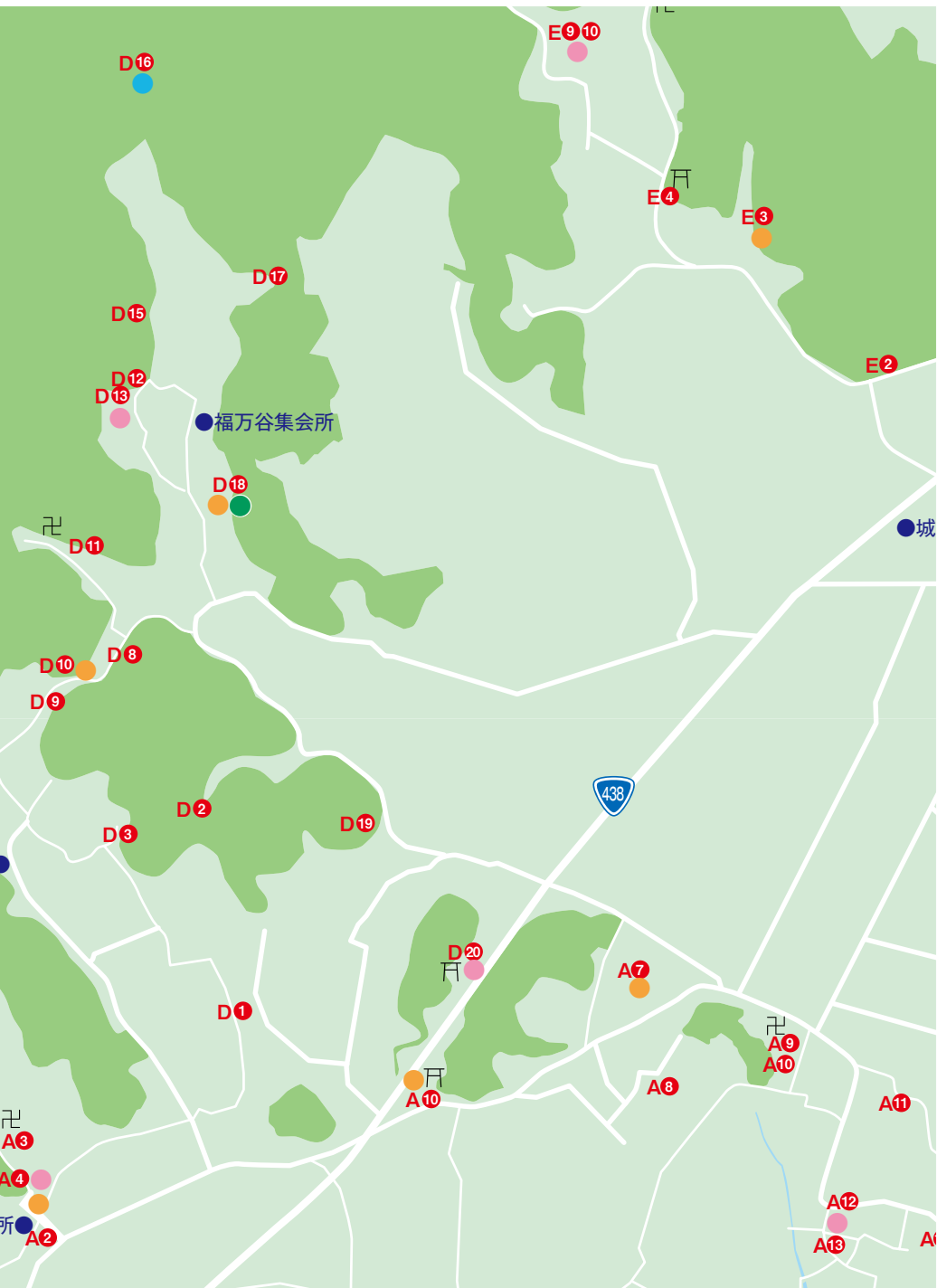
A⑤

戸  
A⑤

戸  
A①

銅之鳥居集会所

C⑦ 戸



①六地蔵ろくじぞう — 銅之鳥居地区の墓地 — 〔柿谷〕

柿谷川かきたにがわ沿いの谷の斜面しゃめんに墓地があり、六地蔵ろくじぞうが並んでいます。一番右側の像には「享保六辛丑きょうほ じんちゆう(1721)年」「七月廿四日講中」の記銘きめいがあり、銅之鳥居地区の墓地になっています。



六地蔵〔柿谷〕

②中山家の祠ほこら — 一宮城主の弟を祀る中山祠まつ — 〔上福万〕 『八万村史』によると、天正

10 (1582) 年、一宮城主一宮成助いちのみやなりすけが、長宗我部ちようそかべ方の謀略ほりやくによって夷山城えびすやまじょうに呼び出され、樵谷こりたにで殺されたとあります (324頁)。樵谷の東には一宮城主一宮成助を祀る事勝祠なりなが、西には弟成良を祀る中山祠なつがあるとのこと (275頁)。



中山家の祠〔上福万〕

西の柿谷側で、中山家の持ち山の尾根上に祠があります。毎月一日に中山氏がお参りしていますが、由来については詳らかではなく、昔は大きな松の木があって目印になっていたそうです。石積みいしづみの基壇きだんに、流破風の屋根の砂岩の祠で、中山祠ではないかと思われます。(資料編：「祀られる武将の祠」参照)

③中山家のオフナタサン — 『名東郡下八万村分間絵図』に「舟戸」の記載 — 〔柿谷〕

『名東郡下八万村分間絵図』に「舟戸」の文字が見えます。中山家の門の横さんろくの山麓さんろくに中山家のオフナタサンが祀られています。失せものにご利益りやくがあるとのこと、毎月一日に御神酒おみきと洗



オフナタサン〔柿谷〕

米を供え、正月には御神酒、鏡餅を供えているそうです。一度祠を他所に移転しましたが、夢のお告げで元より若干山麓寄りの当地に祀るようになりました。

#### ④農神社 — 『名東郡下八万村分間絵図』に「埜神」の記載 — 【柿谷山】

『八万村史』に柿谷の小祠として「農神社（字柿谷山八十四番地祭日旧五月五日）」（275頁）とあります。また、『名東郡下八万村分間絵図』にも「埜神」と記されています。柿谷で「のうがみさん」と呼ばれるその祠は、山の畑への途中<sup>とちゅう</sup>にあります。柿谷の集落から西の墓地を過ぎ、さらに進んで水が涸れた谷川<sup>か</sup>を渡って山道<sup>たど</sup>を辿ると、山肌<sup>やまはだ</sup>に沿うように高さ1mほどの石積みの基壇に半分壊れた小祠<sup>こわ</sup>があります。祭礼などは久しく行われていません。



農神社（柿谷山）

⑤山神社 — 柿谷の山の神 — 【柿谷】 八万霊園の手前で、西に少し登った竹林の中に山の神の祠と鳥居があります。（資料編：「山の神信仰」参照）



山神社（柿谷）

⑥溜池の水神さん — 今も行われているユル抜き — 【柿谷】 八万霊園横の道をさらに登ると右側に溜池が見えてきます。ここは棚田の用水の水源地で、明治17

(1884)年に溜池築造を決定し完成したものです。当時は現在の八万霊園も棚田であったそうです。現在3軒で利用しています。田植え前頃からユル抜きが行われており、水を抜くと一列に並んだユル（桐製の長さ50cm前後の棒）を見ることが出来ます。

溜池の北側に水神の祠があり、  
溜池ためいけに向かってたっています。なお、  
南側には不動明王の石仏があります。  
(資料編：「水神信仰」参照)



ユルヌキ〔柿谷〕

⑦ 沢の水神さん — 大きな岩の上 —〔柿谷〕

沢沿いを奥へ10分ほど登ると大きな  
岩の上に蔦つたの絡からまった祠があり、こちらも水神と  
のことです。かつてはこれより上にも山の畑があ  
り、通り道だったと聞きました。付近に行場もあつ  
たそうです。(資料編：「水神信仰」参照)



水神〔柿谷〕

⑧ 馬越うまごえ(うまごし) — 首なし馬の伝説 — 柿谷地区と福万谷  
地区を結ぶ峠道があります。戦前は木が生おいしげ茂り  
荷車がやっと通るほどの狭せまい峠道しだいでしたが、次第  
に道幅を広げて高低差も少なくなりました。この峠  
を首のない馬が走ると語り継つがれてき  
ました。

かつて峠の福万谷入り口付近には  
棚田があり、水に映る月があまりにも  
美しいということで付近の人は「田毎  
の月」と呼んで愛でていました。



馬越〔柿谷・上福万〕

⑨ 地神塔じじんとう〔柿谷〕 馬越うまごえ(うまごし)の入口付近に柿谷の地神塔があります。やや小高  
い位置にあったものを、昭和40年代に山を削り、その跡地に新しくうつしました。  
(資料編：「地神信仰と社日」参照)。



### ⑩峠の地蔵 — 柿谷講中の記録 —〔柿谷〕

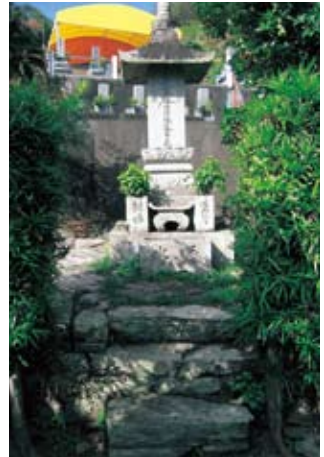
馬越の堂の中に地蔵が祀られています。「法界萬靈 施主 久米右エ門 利左エ門 六蔵」「柿谷講中」「寛政十一未歳十一月廿四日」の記録があります。1799年11月24日に柿谷の久米右エ門、利左エ門、六蔵をはじめ柿谷の人たちによってたてられたことがわかります。



峠の地蔵〔柿谷〕

### ⑪清涼寺 — 開祖の鳴らす鉦の音 —〔上福万〕 紫雲山

清涼寺、日蓮宗 本尊は釈迦如来です。慶応2(1866)年蓮乗日現上人によって開かれました。現住職は澤田妙信氏。日現上人開基の経王堂内には鬼子母神、経王大菩薩が祀られています。8月第1日曜日に施餓鬼供養が行われ、祈祷寺としても知られています。日現上人は即身仏となつたと伝えられています。明治生まれの祖父母から上人が「定に入る」ため土中で念仏を唱えながら亡くなつた経緯を聞いた人もいます。上人の鳴らす鉦の音がちーんちーんと聞こえていたけれど、何日か(21日間とも)した後、経の声がなくなったとのこと。開祖の塔のあるところがその場所で、澤田妙信氏は履物を脱いで掃除するとのことでした。



清涼寺開祖の塔〔上福万〕

### ⑫一王子神社 — 天照大神の第一王子 —〔福万山〕

八万町には四つの王子神社があると『八万村史』にあります(275頁)。いずれも天照大神の第一、第二、第三、第四の王子を祀つたされます。3番目は向寺山の王子神社、4番目は長谷の四王子神社です。それでは、1番目と2番目はということになりますが、

1番目は福万谷、2番目は柿谷にあると書かれていました。『名東郡下八万村分間絵図』にも一王子、二王子の文字が見えます。1番目の王子神社を捜したところ、黒岩神社入り口付近にあるということを知りました。1番目の鳥居近くの竹藪に青石の石組みのほこら祠がありました。祭神は『八万村史』によると「正哉吾勝速日天押穗耳命」（275頁）、御神体は見当たらず、祭礼が行われなくなっ



一王子神社（上福万）

て久しいようです。王子の祠については他にも諸説あるようですが、なぜ八万町の山麓に祀られるようになったか、興味深いところです。

⑬**庚申塔〔福万山〕** 黒岩神社の一番目の鳥居前の細い道を左に入ると竹藪の中に庚申塔があります。かつて庚申講がおこなわれていたことがうかがわれます。（資料編：「庚申塔と庚申信仰」参照）

⑭**黒岩神社** — 福万谷・柿谷の氏神 — **〔福万山〕** 黒岩神社の鳥居より、山道をゆっくり歩いておよそ30分ほどで黒岩神社に着きます。『八万村史』では、「寶永年間（1704～1711年）地方民衆の伊勢参宮せし記念として当時の先達の発議に



黒岩神社（福万山）

より地方守護神として勧請せしものなりと」（271頁）とあります。祭神は大山祇命で、山の神です。昭和3（1928）年の山火事で黒岩神社のみ類焼がなかったこともあり、霊験あらたかな神として知られるようになり、祭礼ともなると麓は人で溢れるほどであったそうです。今も福万谷・柿谷の

氏子により丁重に祭礼が行われています。

なお、黒岩神社境内を少し下りたところに役えんの行者ぎょうしゃの像や小祠があります。行場として、平成元（1989）年頃まではここで行をする人がいたそうです。（資料編：「山の神信仰」参照）



埜神（福万山）

⑩牛の絵の石塔 — 埜のがみ神 — 〔福万山〕 『名東郡下八万村分間絵図』に「埜神」の記載があります。

福本氏の持ち山の中腹、駒形砂岩の石塔で、南向き。高さ55cm「延宝四丙辰えんほう へいしん(1676)年十一月廿三日」

の記銘があり、下方部に牛の絵があります。この石塔の呼称は特にありませんが、この地を「のうがはん」と呼んでいたそうです。川の上流で木を切り出していた際に牛が転落して死んだので祀ったとの伝承があります。

⑪福万谷地区の水神さん — 棚田への水源地 — 〔福万山〕 福万谷川の上流域に水



水神（福万山）

が細く流れ落ちている淵ふちがあります。岸辺あおいしに青石（幅150cm、高さ50cm）を積み上げて囲った祠2基があります。

右が「祇園さん」、左が「水神さん」です。この淵うしぶちは牛淵と呼ばれ、棚田たなだへの用水の水源地でした。現在は杉林になっていますが、淵の下方は10

枚ほどの棚田たなだがあり、道も整備されていたそうです。戦後間もなくまでは子供たちの遊び場でした。（資料編：「水神信仰」参照）

⑫福万谷地区の溜池ためいけと長宗我部越ちようそかべごえ 福万谷には溜池ためいけが2つありました。明治中頃につくられたもので、戦後間もなくその役目を終えました。山の上にある溜池

は明治16 (1883) 年に完成したもので、今も満々と水を湛<sup>たな</sup>えており、側には溜池に関する碑<sup>ひ</sup>があり、ユル抜きの溝<sup>みぞ</sup>も残っています。かつては小学校高学年くらいの子供の遊び場でもあり、ユル抜きのあと、鰻<sup>うなぎ</sup>や鯉<sup>こい</sup>をとるのも楽しみだったそうです。

また、福万谷から中津浦へ続く「長宗我部越」は、この池の東に細い道があったようですが、宅地開発により途<sup>とぎ</sup>切れています。

### ⑱地神塔・オフナタサン・山神社〔上福万・福万山〕

地神塔横の細い山道を少し登るとオフナタサンの小祠<sup>よなふう</sup>があります。夜泣き封じの神として知られています。さらに上に福万谷<sup>まつ</sup>で祀る山の神があります。以前は木の祠でしたが10年くらい前に現在の祠になりました。『八万村史』に山神社として「境内三百六十一坪（地神社あり）」（274頁）とあります。（資料編：「山の神信仰」・「地神信仰と社日」仰参照）



オフナタサン〔上福万〕

⑲山口家の祠 — 一宮城主を祀る事勝祠 — 〔上福万〕 『八万村史』に一宮成助を祀<sup>いちのみやなりすけ まつ</sup>ったとする事勝祠は、柿谷と福万谷の間にある山の急坂を少し登ったところにあり、石積みの基壇<sup>きだん</sup>の上に大小の青石、さらに上に石の祠<sup>まつ</sup>が祀られています。祠は「中山神社」と呼ばれ、言い伝えでは、山口家の五代前の先祖が祠の大石の下から鎧兜<sup>よろいかぶと</sup>、銅鏡<sup>どうきょう</sup>を発見し、これを家に持ち帰って床の間に飾<sup>かざ</sup>ったところ、腹痛<sup>おそ</sup>に襲われ、急いで元の場所<sup>よろいかぶと</sup>に鎧兜・銅鏡を返し、以後、丁重<sup>ていちょう</sup>に祀るようになったとのことです。



山口家の祠〔上福万〕

古くは「ことかつさん」と呼んだとのことで、『八万村史』でいう事勝祠である  
と推察<sup>すいさつ</sup>できます。また、周辺の山が古戦場だったことから「血凝谷<sup>ちこりだに(ちごろだに)</sup>」と呼ば  
れています。(資料編：「祀られる武将の祠」参照)

②ユウガサン(慈眼庵<sup>じげんあん</sup>)と切支丹灯笼(下福万<sup>きりしたんとうろう</sup>) 曹洞宗永平寺派慈眼庵<sup>そうとうしゅうえいへいじほ</sup>

は、ユウガサンとして知られています。本尊<sup>ほんぞん</sup>は瑜伽菩薩<sup>ゆかぼさつ</sup>で、火災、盗難などの  
厄災<sup>やくさい</sup>にご利益<sup>りやく</sup>があります。『八万村史』によると、宝暦5(1755)年11月開基<sup>かいき</sup>、

竹林院<sup>ちくりんいん</sup>の末庵<sup>まつあん</sup>でしたが、文政7(1824)

年に丈六寺<sup>ひやくせんおしろう</sup>23代百川和尚<sup>ひやくせんおしろう</sup>が再建し、  
天保年間(1830~1844)に丈六寺<sup>てんぽう</sup>

末庵<sup>じょうろくじ</sup>となったとされています(286  
頁)。また、「一説には今より二百数

十年前竹林院の僧鐵崖<sup>てつがい</sup>、備前岡山の  
瑜伽大権現<sup>ゆかだいごんげん</sup>より瑜伽菩薩<sup>かんじょう</sup>を勧請して



ユウガサン〔下福万〕

開基せしものと伝ふ」(『八万村史』286頁)ともあります。百川和尚が十両で  
購入したとのことで、当初は徳島城下へ行く際の休憩所<sup>きゅうけいじよ</sup>であったそうです。

現在、月祭<sup>つきまつり</sup>といって毎月23日に読経<sup>どきょう</sup>、正月、5月、9月には大般若経の転読  
が行われています。社殿は丈六寺により平成17(2005)年に改築されました。

ここには切支丹灯笼の竿石が残されています。切支丹灯笼は、隠れ切支丹が  
石灯笼の竿石部を十字架やマリア像に見立てて信仰したと伝えられることから、

その名があるが、古田織部<sup>ふるたおりべ</sup>が天正年間(1573~1592)、茶道の庭園にふさ  
わしい形のの一つとして考案したものといわれています。ユウガサンのそれは竿<sup>さお</sup>

の部分のみで、上部が丸く張り出しています。花崗岩で高さは96cm。記銘につ  
いては『徳島市の石造文化財 資料編(一)』に「嘉永7(1854)年か?」(128頁)

とありますが、現在読むことが出来ません。ここでは庚申塔として祀<sup>まつ</sup>られてい  
ます。『八万村史』にも「青面金剛(切支丹灯笼)」とあります。「地神」と書

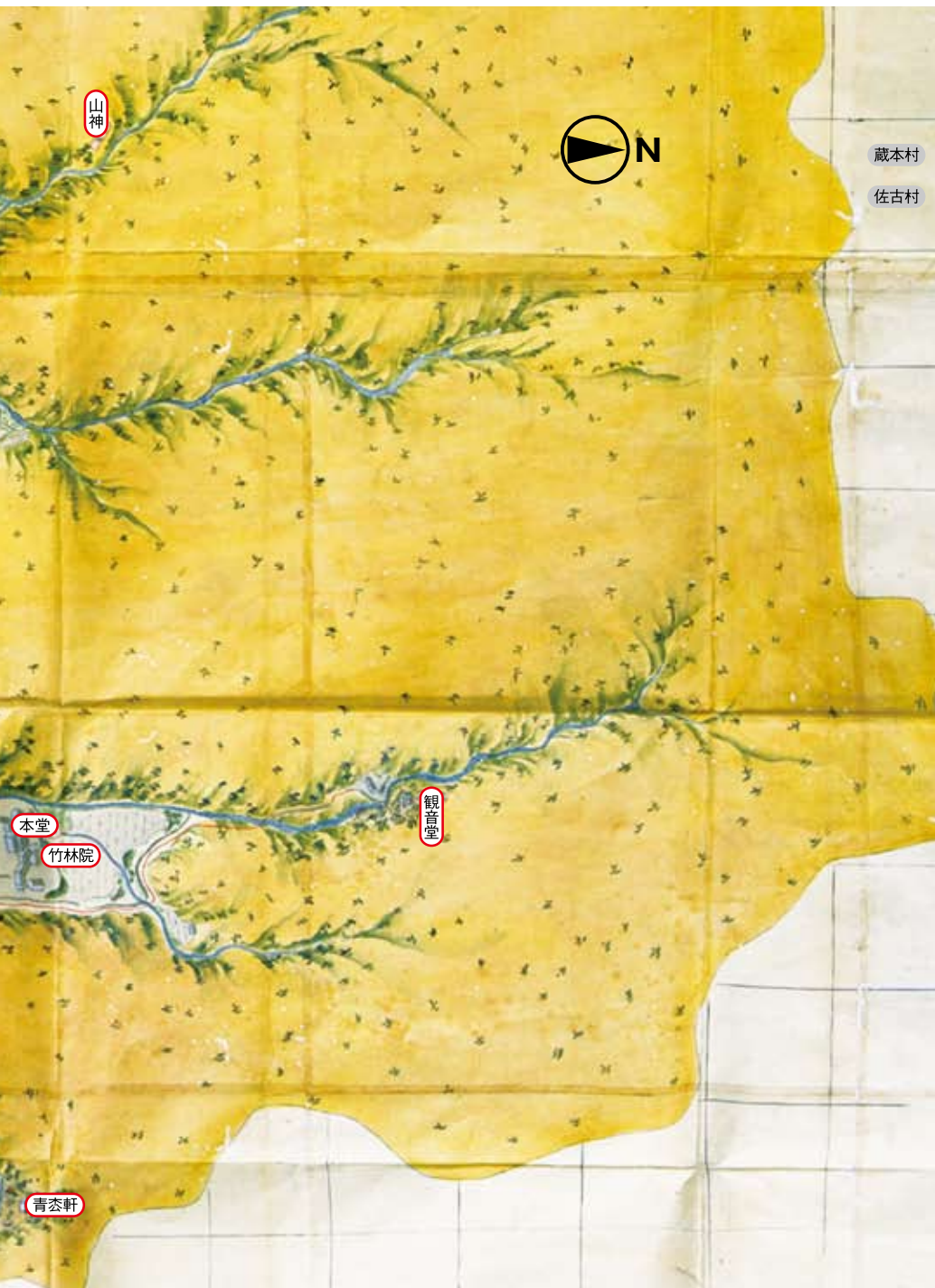
かれた石塔<sup>せきとう</sup>は、ユウガサンの土地を守る神です。

E

# エリア — 絵図 —

(中津浦・中津山)

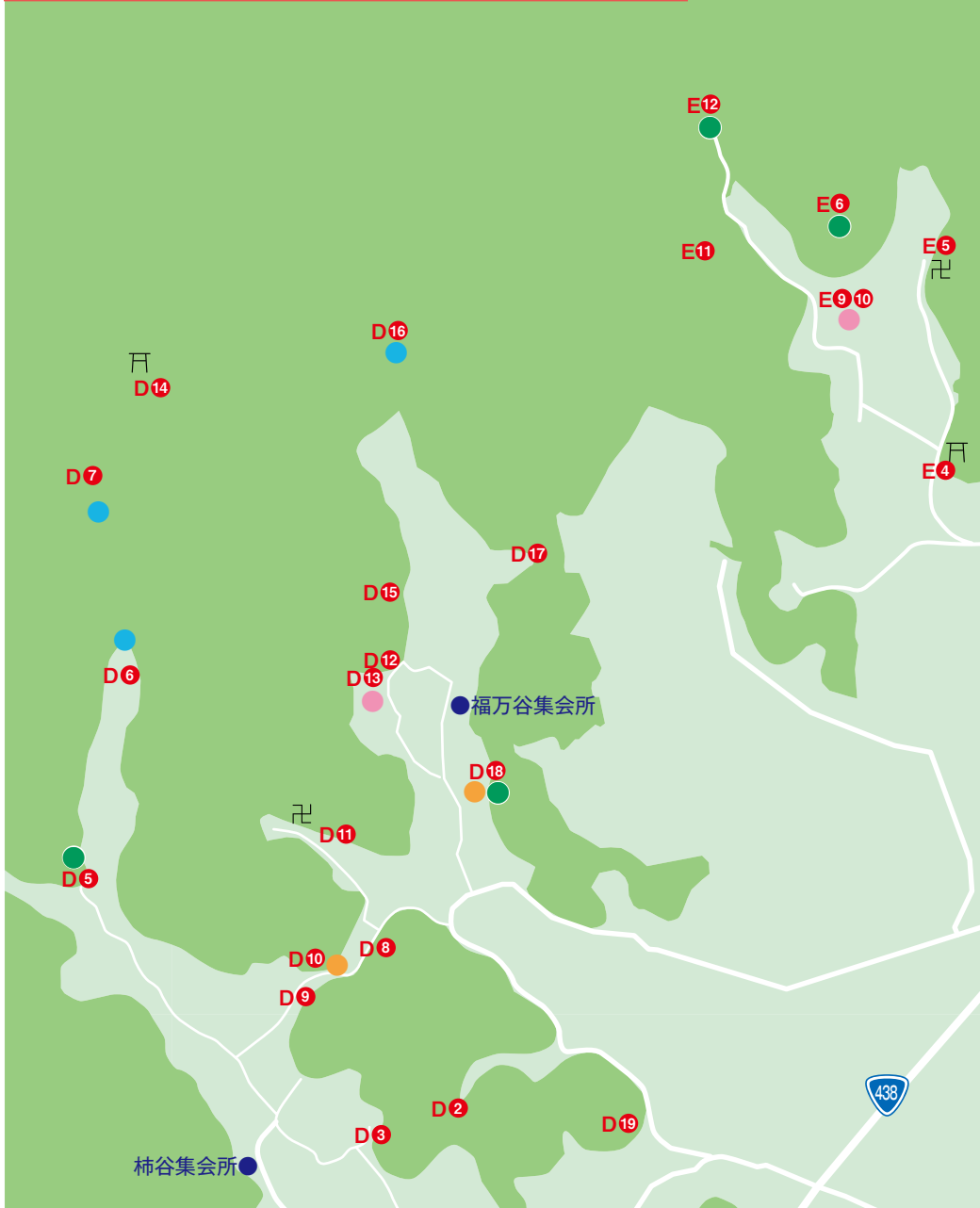






# エリア — 現在 —

(中津浦・中津山)







- E① = 竹林院
- E② = 半跏坐の地藏
- E③ = 地神塔
- E④ = 七社神社
- E⑤ = 雲水庵跡
- E⑥ = 山神社
- E⑨ = 北向地藏
- E⑩ = 庚申塔
- E⑪ = 牧牛庵跡
- E⑫ = 山の神跡

- 山の神
- 水 神
- 地神塔
- 庚申塔



① <sup>ちくりんいん</sup>竹林院 — <sup>くっし めいさつ</sup>徳島県下で屈指の名刹 —

〔中津浦〕 <sup>おうぼくしゅう</sup>宗派は黄檗宗。 <sup>しらかべ</sup>白壁の山門を入ると中国の明時代の <sup>けんちくようしき</sup>建築様式である本堂があります。 <sup>じょうぎょう</sup>貞享元（1684）年頃に造られた書院の庭園は <sup>ごせきざん</sup>呉石山（眉山南面）を <sup>しゃっけい</sup>借景とする <sup>つきやませんすいかいゆうしき</sup>築山泉水回遊式で、築山



竹林院〔中津浦〕

の上には十三層塔（現在十二層）が建っています。高さ4.5メートル、鎌倉期の様式をもち <sup>けんしてゆうけいぶんかざい</sup>県指定有形文化財（建造物）に <sup>けんぞうぶつ</sup>指定されています。 <sup>しずかごせん</sup>静御前の供養塔という伝説がありますが、諸説あります。なお、庭園は <sup>さいがいふつきゅう めど</sup>災害復旧の目途がたたないため、2009年現在入ることはできません。

『八万村史』によると、古くは竹林庵と呼ばれる庵があり、 <sup>めいおう</sup>明応年間（1492～1501）に整備され永明寺となり、さらに <sup>えんぼう</sup>延宝2（1674）年に <sup>てつがい</sup>鉄崖が再興したとあります（285頁）。鉄崖は近江の <sup>あさいながまさ ひまご</sup>浅井長政の曾孫にあたり、 <sup>はんかろう</sup>徳島藩家老 <sup>いなだくろべえ ふじんけいがんいん</sup>稲田九郎兵衛の夫人景岩院を頼って阿波へ来ました。最初鉄崖は <sup>ずいがんじ</sup>瑞巖寺へ入り、やがてその後来朝した木庵のもとで <sup>もくあん</sup>黄檗宗を学びました。現在の本堂は明治43（1910）年頃に改築したもので、徳島県下でも <sup>くっし めいさつ</sup>屈指の名刹として知られています。

② <sup>はんかざ</sup>半跏坐の地蔵 — <sup>じぞう</sup>女性たちの息抜き、お地蔵さんの日 —

〔中津浦〕 <sup>やまはだ</sup>切り通しの山肌に沿って地蔵堂があり、半跏坐の地蔵が祀られています。絶えることなく、 <sup>まつ</sup>水や <sup>しきみ そな</sup>榊が <sup>あつ しんこう</sup>供えられ、篤く信仰されていることがうかがえます。3月24日を「お地蔵さんの日」といって、10年程前



半跏坐の地蔵〔中津浦〕

まではこの地蔵の向かいの <sup>きんりん</sup>広場に <sup>よ</sup>近隣の女性数人が <sup>しんぎょう とな</sup>寄って、心経を唱え、お供

えした団子や菓子などをみなで分け合い、<sup>よもやまばなし</sup>四方山話をしながら茶を飲んでいました。普段は農作業や家事に追われる女性たちの息抜きの場であり、楽しみの場であったようです。

③<sup>じじんとう</sup>地神塔 — 台座に<sup>ふ</sup>伏せこんだナガイモン —

〔中津浦〕<sup>すそ</sup>山裾の高台に砂岩の五角柱の地神塔が祀られています。地神塔の<sup>きだん</sup>基壇にナガイモンをふせこんだという話があります。ナガイモンとは<sup>へび</sup>蛇のことで、戦後まもなくの頃、



地神塔〔中津浦〕

<sup>きだん</sup>基壇にあいた穴に当時よく<sup>しゅつぽつ</sup>出没していた蛇をふせこんだとのこと。地神塔の<sup>となり</sup>隣にある<sup>さがんせい</sup>砂岩製の<sup>しょうし</sup>小祠は、<sup>ちんじゆ</sup>背後の山を所有する家の鎮守です。

④<sup>しちしゃじんじや</sup>七社神社 — 流れてきた神・<sup>竜宮祠</sup>竜宮祠 — 〔中津浦〕『名東郡下八万村分間絵図』には

「竜宮」の文字が見えます。『八万村史』の<sup>龍王祠</sup>龍王祠の項には、この神は大野の<sup>龍王神社</sup>龍王神社から<sup>ひょうちやく</sup>洪水により流され漂着したので、中津浦の人々が「逆流龍王」と呼んで祀ったとあります（339頁）。洪水によって中津浦まで流れてきたとされていますが、これは<sup>いじゆう</sup>移住をした人々がかつて住んでいた土地の神を新しい土地に<sup>まつ</sup>祀ったものとも<sup>すいさつ</sup>推察できます。

この龍王社は、明治44（1911）年<sup>ほこら</sup>祠は残したまま八幡神社に<sup>はちまん</sup>合祀されました。『八万村史』には、「俗に七社サンと<sup>しょう</sup>称して<sup>りゅうおうしん</sup>龍王神、<sup>あきばしん</sup>秋葉神、<sup>いなりしん</sup>稲荷神、<sup>や</sup>山ノ神、<sup>ふなとしん</sup>農ノ神、<sup>ななはしら</sup>矢ノ神、<sup>さんろくしよしよ</sup>船戸神の七柱ノ神を山麓諸所に祀りありしが」八幡神社



七社神社〔中津浦〕

に合祀したとあります（275頁）。戦後中津浦の人々の活動により、八幡神社より龍王社を戻し、富士権現を加えた8つの祠を七社神社として祀るようになりました。

⑤雲水庵跡 — 東嶽禪師と大きな墓碑の数々 — 【中津浦】

築地塀、大きな五輪塔、今は廃庵となった雲水庵跡です。宗派は臨済宗、元和5（1619）年（元和6年という説もある）に蜂須賀家政の義兄である東嶽によって開かれました。蜂須賀家から厚遇を受け、境内は844坪、堂塔が建ち並んでいたと伝えられていますが、天保13（1842）年に火災にあい、規模が小さくなったといわれています。廃庵になると、庵の主だったものは興源寺に移しました。

山麓の開山堂跡の墓地には開祖東嶽の墓碑があります。大きな五輪の塔は、蜂須賀氏の家老であった池田氏歴代の墓碑です。

戦後間もない頃までは小さな子供が4月8日のお釈迦さんの日に甘茶をもらいに行っていたとのことですが、昭和50年代には、竹などが生い茂り、崩れかかった庵がわずかに残るのみとなっていました。平成元

（1989）年ころには建物も取り壊され、現在の状態になりました。この土地は現在、年に1回の掃除など中津浦町内会で管理されています。

⑥山神社 — 地域の人々の親睦の場 —

【中津浦】雲水庵跡の南に祠への登り口があります。尾根の広場奥には、西向きに四柱の祠が並んでいます。大山祇命と富士大権現です。祠が複数あるということは他の山から寄せて

広い敷地にわずかに残った



雲水庵跡（中津浦）



雲水庵跡（中津浦）



山の神（中津浦）

きた可能性もありますが、<sup>しょうさい</sup>詳細は不明です。

祭礼は一時<sup>とぎ</sup>途切れていましたが、戦後間もなく行われるようになりました。山仕事が激減した近年でも、地域の人々の親睦の場となっています。

⑦<sup>ちようそくべごえ</sup>長宗我部越 — 生き生きと語られる長宗我部伝説 —〔中津浦〕 中津浦の井上家では代々、長宗我部軍が家の前を<sup>つ</sup>通って山越えをした伝説が語り継がれてきました。戦国時代、長宗我部氏が進出してきた際のことです。長宗我部軍は雲水庵の前の道を通り、現在の井上家の前から南西の方角へ山沿いの細い道を行き、山越えをして福万谷へ向かい、福万寺を焼いたとのことです（驚いた一宮勢は迎え撃とうとしましたが、福万谷と柿谷の間にある<sup>ちこりだに(ちころだに) かいめつ</sup>血凝谷で壊滅したと伝えられています)。井上家の墓地の裏手に現在も細い道があり、以前はその道を越えると福万谷の<sup>ためいけ</sup>溜池に出ることができましたが、現在は<sup>たど</sup>辿ることはできません。

⑧<sup>かみすきだに</sup>紙漉谷 — 銀札の台紙も製造 —〔中津浦〕 『阿波志』に「紙漉谷 亦八万下村に在り居民紙を造る」(788頁)とあります。『八万村史』(208頁)によると、室町時代の終わり頃、つまり夷山城が<sup>きず</sup>築かれた頃から紙を漉く家があったとのことです。延宝8(1680)年には銀札の台紙を1年間ほど藩に納めていました。その後、紙漉きは<sup>きようほう</sup>享保年間(1716~1736)以後も数十年行われていましたが、だんだん量も減っていったようです。

また、2008年6月には<sup>きれい</sup>綺麗な水であることの証である<sup>あかし</sup>蛍がたくさん舞ったとのことでマスコミに取り上げられました。水路の一部をコンクリートにしなかったためとも言われています。



俗に紙漉谷と呼ばれる谷を望む〔中津浦〕

⑨<sup>きたむきじぞう</sup>北向地蔵 — 北向きのお地蔵さんはありがたい —

〔中津浦〕 「北向きのお地蔵さんはありがたい」とされ、特に子供を助けてくれるといわれています。5、6年前までは毎月24日のお地蔵さんの日に、近くの女性たち10人余りが集まって般若心経を唱える行事が行われていました。24日には、<sup>はんにやしんぎょう</sup>般若心経を唱える行事が行われていました。24日には、<sup>そな</sup>供え物の<sup>だんご</sup>団子や<sup>かし</sup>菓子、<sup>せきはん</sup>赤飯などを用意し、順に雲水庵入口付近の六地蔵、雲水庵の中の<sup>いはい</sup>位牌、北向地蔵と、般若心経を5回ずつ唱えて巡ります。最後の北向地蔵の前では団子、菓子などのほか、<sup>おりようぐ</sup>御霊供を2膳<sup>ぜん</sup>供え、<sup>むしろ</sup>筵を敷き般若心経を唱えた後、供え物を下げ茶を飲みながら<sup>よもやまばなし</sup>四方山話を楽しんだそうです。



北向地蔵〔中津浦〕

⑩<sup>こうしん</sup>庚申塔 — 昔は庚申待ちが行われていた？ — 〔中津浦〕 台座には「<sup>えんきょう</sup>延享<sup>ていぼう</sup>四丁卯(1747)

正月二九日」との記銘があり、<sup>しょうめんこんごう</sup>青面金剛、猿(申)が刻まれています。

太平洋戦争後（以下戦後）急速に行われなくなり、中津浦でも庚申講が行われていたことを記憶している人はいませんでした。今から約260年前は庚申講が行われていたのでしょうか。

かつては広く庚申待ちの行事が行われていました。60日に1度回ってくる庚申の夜に行われる行事のことで、この夜は眠ってはいけないとされ、庚申を信仰する講中の人たちが集まって眠気覚ましに<sup>よもやまばなし</sup>四方山話をしたり<sup>か</sup>賭け事などの遊びをして過ごしました。この夜、人間のお腹に<sup>なか</sup>いるという<sup>さんし</sup>三戸の虫が、<sup>すいみん</sup>睡眠中に<sup>ぬ</sup>身体から<sup>ぬ</sup>抜け出し<sup>のぼり</sup>天に昇り、天帝にその人の<sup>ざいあく</sup>罪悪を報告すると信じられていたからです。もともとはこうした庚申信仰の信者た



庚申塔〔中津浦〕

ちが寄って庚申講をつくり、このような塔を作ったものと考えられています。

⑪ **牧牛庵跡〔中津浦〕** 『八万村史』によると、文政12(1829)年に僧惠操が創立したとされています。(344頁) 臨濟宗慈光寺の末庵で、390坪の境内に四国八十八箇所の霊場をうつしたとありますが、明治初年には廃庵となりました。

戦後間もなくまでは、石段や高さ2～3mの土止めの石垣が残っていたそうです。四国八十八箇所については現在この地にはないようです。

⑫ **山の神跡** — 目印は大きな杉の木 — **〔中津浦〕** 『名東郡下八万村分間絵図』によると、中津浦地区に一箇所山神の記載があります。場所は乾谷川上流で、昔は大きな杉の木の根元に石の祠があったとのことですが、杉の木は雷に打たれて裂けてしまったそうです(現在の杉はその後に生えてきたもの)。石の祠も最近の砂防ダム工事の際に消失しました。

この山の神は「のうがみさん」と呼ばれていることが多かったようで、現在農神社として七社神社に祀られているとのこと。小祠は身近な神として人々の願いを受け止めていました。小祠の神は人々の願いによってその役割が変わることがしばしばあるようです。

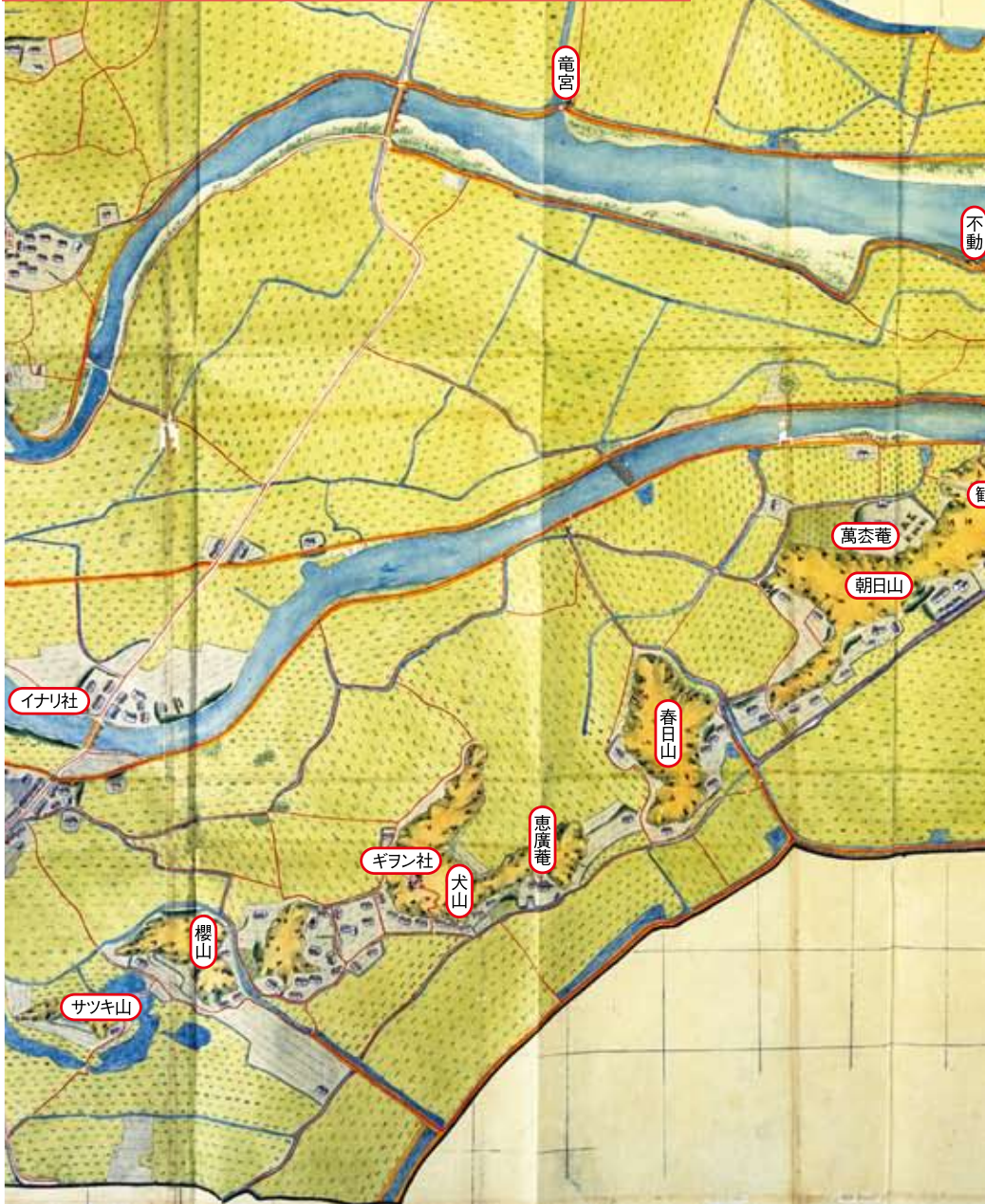


かつての山の神付近〔中津浦〕

# F

## エリア — 絵図 —

(犬山・大野・沖須賀・川南・弐丈)







# F

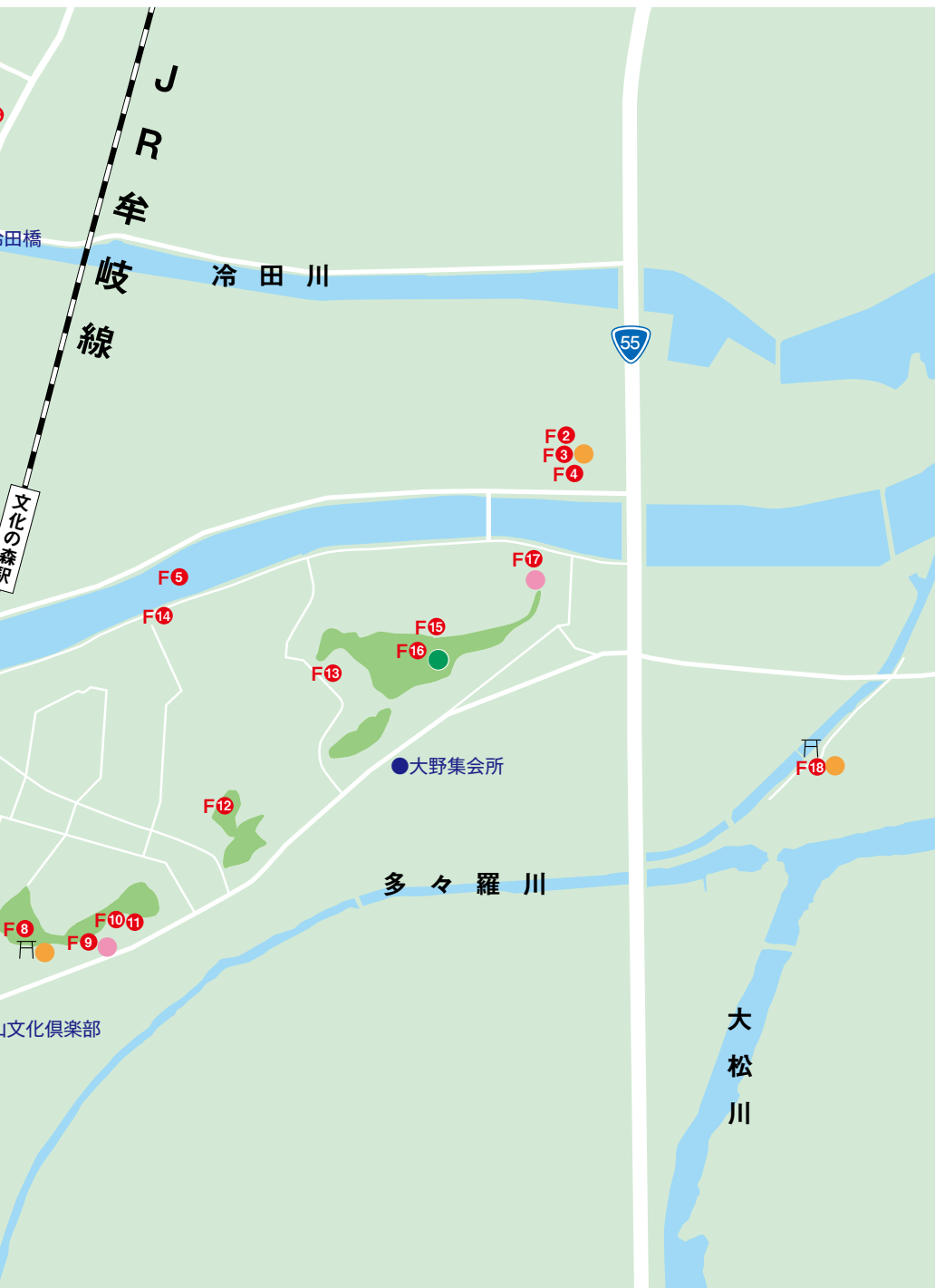
## エリア — 現在 —

(犬山・大野・沖須賀・川南・弐丈)

- F② = 祇園さん
- F③ = お地神さん
- F④ = 波切りお不動さん
- F⑤ = 弐丈の堰跡
- F⑧ = 八坂神社
- F⑨ = 地蔵庵跡
- F⑩ = 恵光庵跡
- F⑪ = 恵光庵跡の地蔵と庚申塔
- F⑫ = 朝川家墓碑
- F⑬ = 安産地蔵
- F⑭ = 堤防の地蔵
- F⑮ = 万松庵跡
- F⑯ = 山の神
- F⑰ = 庚申塔
- F⑱ = 八大龍王神社

- 山の神
- 水 神
- 地神塔
- 庚申塔





①<sup>おきずか</sup>沖須賀地区 『名東郡下八万村分間絵図』を見ると、沖須賀地区には田が一面に広がり、園瀬川よりも<sup>つめたがわ</sup>冷田川の方が大きな流れであったことがわかります。冷田川は水量が多く、明治末頃までカンドリ舟や帆船が<sup>ほんせん えびすやまんろく</sup>夷山山麓にあった夷山池近くまで航行できました（『八万わがふるさと』151頁）。その冷田川に、明治38（1905）年から夷山の濱口市蔵氏が、現在のJR牟岐線からバイパス55号線東側までの間の南岸を<sup>う</sup>埋め立てて新田をつくりました（現在はゴルフコース）。

沖須賀地区の耕作者は大野の農家が多かったため、個人所有のカンドリ船を使って園瀬川を渡っていました。また沖須賀で八大龍王神社の祭礼の当家をしたときには、船に<sup>みこし</sup>神輿をのせて沖須賀に迎えたこともありました。それまで河床の<sup>いしだみ</sup>石畳だったところに昭和9（1934）年4月法花大橋が<sup>か</sup>架かりましたが、戦後まで船の利用が続きました。

<sup>そのせがわ</sup>園瀬川による水の被害を受けてきましたが、戦後<sup>ていぼう</sup>堤防改修工事が進み、平成5～8（1993～1996）年にかけて川幅が60mから110mに広がりました。川の中に今も以前の<sup>ていぼうあと</sup>堤防跡を見ることができます。

②「<sup>ぎおん</sup>祇園さん」— <sup>ほくら</sup>祠が並ぶ聖域 —

〔沖須賀〕絵図に「若宮」とある場所には、今もこんもりと木が茂っています。基壇上に並ぶ6つの石造物は、右から<sup>じしん わかみや ごずてんのう</sup>地神、若宮、牛頭天王、<sup>まんぶくしん</sup>萬福神で、あとの2つは不明です。祠の一つ「<sup>ぎおんごずてんのう</sup>祇園牛頭天王」を「祇園



祇園さん（沖須賀）

さん」と呼んでおり、この祠のある場所全体を指す名称ともなっています。旧暦6月7日には神職の富士氏が神事を<sup>と</sup>執り行っています。

この土地の所有者である福山家には、「地神社」「若宮神」「祇園牛頭天王」「萬福神」「不動明王」の<sup>のほり</sup>幟が保管されています。今も正月、旧暦6月7日、春・秋の<sup>しゃにち</sup>社日の年4回、<sup>しめなわ</sup>注連縄を新しいものに取り<sup>か</sup>替え、全ての祠に<sup>おみき</sup>御神酒と

かがみもち おしき そな  
鏡餅・いりこを折敷にのせて供えています。

この「祇園さん」には、沖須賀の土地を開いたと伝えられる撫養のタカバタケ夫妻の墓もあります。

③お地神さん — 耕作者による祭り — (沖須賀) お地神さんの祭り(社日)には戦前、沖須賀で畑や田を耕作していた人々が大野や夷山から来ていました。「地神社」の幟にも「沖須賀氏子中」とあります。神職による神事はありませんでしたが、地神塔の前に敷いたむしろの上で供えた御神酒をいただいて直会をしていました。「クロムギ」または「メガシ」と呼ばれる麦菓子もふるまわれました。



地神塔(沖須賀)

④波切りお不動さん — 冷田川の水害から守る —

(沖須賀) 冷田川のかつてのほとりに不動明王像がたっていました。「波切りお不動さん」と言われており、冷田川の堤防がよく切れて水害にあうことが多かったためにたてられました。明治年間(1868~1912)に冷田川南岸が埋め立てられたこともあり、「祇園さん」の場所で地神などと一緒(いっしょ)に祀るために現在地に移転しました。祭礼は同じく正月、旧暦6月7日、春・秋の社日の年4回行われています。背面に「男女講中」の刻字があります。



波切不動(沖須賀)

⑤式丈の堰(松本堰)跡 — 先人の苦勞 — 5月~10月頃にかけて大野・下大野(現西新浜町)・沖須賀の農家が共同で園瀬川堤防の地蔵がたつ位置よりやや下流側に堰をつくり、その上流側に「ユル」を設けて農業用水を引いていまし

た。土台の石がまだ川の中に残っていますが、そこに板を立ててつかい棒<sup>ぼう</sup>で支え、上流側に法花大橋付近から船で運んできた砂利<sup>じやり</sup>を盛り上げ、堰をつくっていました。大水が出たときは板を倒しますが、その判断と作業は命がけとっていいほど大変なもので



式丈の堰（松本堰）跡

した。田の水が必要なくなると板を外して砂利を流れるままにし、毎年堰をつくり替<sup>か</sup>えていましたので、大変な労力と資金（目砂をかく費用）が必要でした。

⑥式丈<sup>しじょう</sup>・川南<sup>かわみなみ</sup>地区 土佐街道（現県道宮倉徳島線）を挟んで冷田橋から法花大橋間にあるこの地区は、『名東郡下八万村分間絵図』を見ると一面の田です。その後、街道に沿って家がたち始め、昭和30年代以降急速に家が増えました。

⑦七ツ山と犬山・大野 犬山・大野地区に島のように点在する7つの小山を総称して「七ツ山」と呼んでいます。昔は「海中の孤島」であり、「後世庄野喜三郎（庄野和泉守<sup>まつえい</sup>の末裔と称する者）此の山の周囲<sup>かいこん</sup>を開墾」（『八万村史』326頁）し、藩政期を通じて耕地が広がったとされています（同28～32頁）。

七ツ山は西から霧島山（眉山・杜鵑<sup>さつきやま</sup>花山）－今は削られて住宅地になっていますが、周囲にあった「ひょうたん池」がわずかに残っています、桜山（蛇池山）－西山裾に法花傍示<sup>すそ</sup>の地神塔<sup>じじんとう</sup>があります、中山（長山<sup>ぎおん</sup>）、祇園山（犬山）－山頂に八坂神社<sup>やさかじんじや</sup>があります、春日山（天神山）および大崎山（朝日山）－古墳が発掘されました、梅山－中山の南方にありましたが、削られて消失しています。10代藩主重喜<sup>しげよし</sup>が隠



七ツ山のうち大崎山（朝日山）、春日山（右）を望む

居後に住んだ大谷御殿<sup>おおたにごてん</sup>の庭園に取り入れられ、花が植えられたと伝えられています（『八万村史』40～41、326頁）。

犬山・大野地区では現在、徳島南環状道路の建設中であり、地域の様相<sup>ようそう</sup>が変貌<sup>へんぼう</sup>しつつあります。

⑧ **八坂神社** — 山上に鎮座する — 〔犬山〕

元禄年間（1688～1704年）、犬山（祇園山）頂上に素戔鳴尊<sup>すさのおのみこと</sup>を祀り祇園神社<sup>こんりゅう</sup>を建立、明治4（1871）年八坂神社と改名。その後、山を削って昭和63（1988）年4月、現在の社殿に改築しました（境内「八坂神社御由緒」より）。昭和30年代頃まで大晦日には、子供が中心になって社殿のいろりで持ち寄った餅を焼いて食べながら新年を迎える習わしがありました。

社殿横にある祠は八幡神社の遥拜所<sup>ようはいしょ</sup>です。境内の地神塔横にある祠は農神で、田植えが終わると牛や馬の神様である農神<sup>れいまい</sup>にお礼参りをしていました。神社への登り口に大きな燈籠<sup>とうろう</sup>があります。昭和2（1927）年5月の建立で、基礎<sup>かめ</sup>が亀の形にあらわれています。



八坂神社〔犬山〕



八坂神社の燈籠〔犬山〕

⑨ **地蔵庵跡** — かつての庵跡1 — 〔犬山〕

恵光庵跡<sup>けいこうあんあと</sup>の西隣、犬山地区の共同墓地<sup>ふんせい</sup>があるところに文政元（1818）年7月15日に創建され、大正初年頃までに廃庵となりました（『八万村史』



地蔵庵跡の六地藏〔犬山〕

340,344頁)。墓地中央には六地藏があり、「享保六辛丑（1721年）七月十八日」の刻字があります。

⑩ 恵光庵跡 — かつての庵跡2 — (犬山)

3代藩主蜂須賀光隆の正室が祇園山東南麓に創建し、本尊の随求菩薩は日本三体の一つとして有名だったとされます（『八万村史』340, 343頁）。『名東郡下八万村分間絵図』にも「恵廣庵」と記されていますが、廃庵となって久しく、今は民家が1軒建っています。



恵光庵跡 (犬山)

⑪ 恵光庵跡の地蔵と庚申塔 (犬山)

み上げた祠が2基たっています。東向きは犬山の庚申塔、北向きはお地藏さんで、今もシキビヤ水が供えられています。庚申塔には「奉供養庚申待二世安楽也」「延寶四（1676）年十月庚申日」の刻字があります。

恵光庵跡の入口に青石をきれいに積



恵光庵跡の地蔵 (犬山)

⑫ 朝川家墓碑 — ひっそりとたつ墓碑 — (犬山)

春日山北側畑地の中にブロック塀に囲まれた墓碑が2基あります。碑文にある朝川氏とは『八万村史』によれば、「中国福山城主某故ありて阿波海部郡浅川に來り後ち此地に移住し附近土地を領し蜂須賀家に仕へ」と



恵光庵跡の庚申塔 (犬山)



あります(331頁)。古くは寛文9(1669)年の銘<sup>めい</sup>があります。昭和49(1974)年に春日山<sup>けず</sup>が削られるまでは山の北側中腹にありました。なお、春日山の頂上<sup>ほんじ</sup>にあった1本松の根元には梵字を記した直径5cmほどの石がたくさんあって、さわるとお腹<sup>なか</sup>が痛くなると言われていました。



朝川家の墓所〔犬山〕

⑬安産地蔵<sup>あんざんじぞう</sup> — 地元で祀られている地蔵1 — 〔犬山〕<sup>ばんしょうあん</sup> 万松庵にあったもので、庵が火



安産地蔵〔犬山〕

事にあい、その時に現在地に移転したと伝えられています。犬山の6軒(以前は8軒)で管理しており、毎年1月と7月の23・24日に祭りを行っています。吹き流しを立て、御霊供<sup>おりようぐ</sup>や菓子・果物などを供えます。安産祈願<sup>きがん</sup>のために遠方からもお参りに来ていました。今でもお礼参りの涎かけ<sup>よだれ</sup>が供えられています。

⑭堤防の地蔵<sup>ていぼう じぞう</sup> — 地元で祀られている地蔵2 — 〔犬山〕

園瀬川に式丈の堰があったころ、子供がたくさん泳ぎに来ていました。水の事故が多く、その供養

のためにたてられました。「安産地蔵」と同じく、毎年1月と7月の23・24日に祭りが行われており、幟と吹き流しが立てられます。また毎日掃除、水替えがされ、花が供えられています。台座に「三界萬霊 大野名女講中<sup>かえい</sup> 嘉永七寅(1854)年八月二日」の刻



堤防の地蔵〔犬山〕

字があります。現在のコンクリート製の堂は、平成5～8（1993～1996）年にかけて行われた堤防改修工事時に建て替えられたものです。

⑮万松庵跡 — かつての庵跡3 — 【大野】



万松庵跡【大野】

『八万村史』には、朝日山北麓に元禄16（1703）年2月13日、家老稲田九郎兵衛の菩提のため僧梁巖が開基したとあります(343頁)。庵があった一带は「お庵」や「寺の内間」と地元の人から呼ばれていました。その一角、今はハウスが建つ間に六角柱の各面に地蔵を浮き彫りにした六地蔵が残されています。

⑯山の神 — 「山の神さん、こーい」 — 【大野】

大崎山山頂の墓地東側にあります。祭りは、正月・5月・9月の26日で、祭りの日には、お太夫さん（鳥居氏）、

世話人、子供が一緒に山に登って神事を行い、それがすむと子供らが「山の神さん、こーい」と叫んで他の子供たちに知らせていました。子供たちは供えられていた目菓子（麦菓子）がたのしみで、木の枝に指すなどして持ち帰りました。（山の神に向



山の神【大野】

かってたつ祠は矢部家の鎮守です。）なお、かつて大崎山東端には「天狗松」と呼ばれる大きな松があり、天狗にまつわる伝説が残っています。

⑰庚申塔 — 地元の人に守られている塔 — 【大野】

総高166cm（台座を含む）。青面金剛、二猿、二鶏の浮き彫り、「延寶五丁巳（1677）年下八万犬山之住十月十六日 為十四人建立之」の刻字があります。近所の人たちが庚申の日



庚申塔（大野）

に銘々、団子めいめい だんごを作そなって供えたり、正月には無病息災むびょうそくさいを願ねがって注連飾しめかざりを堂かざに飾かざっていました。

⑱八大龍王神社はちだいいりゅうおうじんじや — 勇社ゆうそうだった川渡御かわとぎよ—〔大野〕 祭神は海

龍之命。現在の所在地は西新浜町2丁目（旧下大野）

ですが、氏子うじこは

大野30数軒で

す。戦災で社殿

が焼けてしま

いましたが、御神体ごしんたいは無事ぶじでした。夏祭り

は7月20日、秋祭り（「小祭りこまつ」という）

は11月4日。昭和19（1944）年まで秋祭

りには神輿みこしが大松川に入る川渡御かわとぎわが行われていましたが、その神輿も戦災で焼

けてしまい、戦後は行われていません。屋台やたい（サッセー）は昭和30年代まで出

ていました。境内けいだいに地神塔じしんとうがあります。



八大龍王神社（大野）



八大龍王神社の神輿の川渡御（大野）昭和15、16年頃の撮影。

（八大龍王神社社殿に掲げられたものをお借りました）



地神塔（大野）



祇園牛頭天王祠（沖須賀）



恵光庵跡の庚申塔（犬山）



恵光庵跡の地藏（犬山）



堤防の地藏（犬山）



## 〔Ⅱ〕資料編



写真 上:名東郡下八万村分間絵図(徳島県立図書館蔵)  
下:天一神社の秋祭り

# 現在の 八万町の姿

山の神・水神  
地神塔・庚申塔の分布



「資料編」で紹介する山の神、水神、地神塔、庚申塔について、徳島市八万町における現在の分布を記載した。それぞれ、山の神を●、水神を●、地神塔を●、庚申塔を●で表記している。

なお「資料編」では、「ガイド編」で紹介していないものも記載しているので、あわせてご覧いただければ幸いである。



# 1 はちまんの山とくらし

## 1) 山の神信仰

### はじめに

八万町は眉山山系の南側にあたり、セツ山（通称）など多くの里山がある。『名東郡下八万村分間絵図』をみると、谷では棚田による耕作を行い、山麓に沿って集落が営まれ、里山は人々にとって大切な場所であったことがうかがえる。ガスや家電製品が普及するまで家庭の燃料は薪であり、薪を採るために山に入ることも多かった。山の神は山仕事の守護神として、また豊かな木々の生育を司る神として、人々の信仰の対象となった。山の神は地域全体の神として祀られることが多いが、個人の持ち山などでも祀られることもある。祭神は大山祇命おおやまつみのみことが多いようであるが、人々は親しみをこめて「山の神さん」と呼んでいる。

『八万村史』には、「俗に山ノ神さんと称へて山の鎮守神なり。毎年旧暦正、五、九月の二十六日を祭日とす。法華谷、福万谷、柿谷の外下八万字向寺山桃館長谷等に在り」（274頁）とあり、多くの山の神が存在していたことがわかる。

### (1) 地区別に見る山の神の祠と祭礼

現在の八万町では北の山沿いの長谷、柿谷、福万谷、中津浦、そして大野、橋本などに地区ごとに、あるいは個人の持ち山などに祀られており、神職による祭礼も行われている。以下に各地区別に見られる山の神について、特に祭礼を中心に記述する。

**長谷** 八万町で最も谷が深いのが長谷地区である。眉山山系の南端にあたり、名東町の地藏院へ向かう「地藏越え」は険しいながらも遍路の近道として知られている。現在長谷の山の神は、谷沿いや山麓にあった祠を下長谷の四王子神社の相殿に合祀している。祭礼は旧暦1月26日、5月26日、



9月26日の年に3回、山の神祭りのとうや<sup>とうや</sup>当家がこれにあたる。長谷では10数軒ずつ奥、中、下の3組に別れ、各組の2軒が当家を務め、毎年、旧暦1月26日に交代する。個人の持ち山に山の神を祀る例が見られ、年末にしめなわ<sup>しめなわ</sup>注連縄をし、鏡餅、御神酒<sup>おみき</sup>などを供えて祈ることが多い。



長谷の四王子神社での山の神祭り

**柿谷** 地域の山神社として祀る。柿谷川沿いの集落のはずれの竹藪にコンクリートの基壇の上に、石の祠と小さな木製の鳥居が建っている。祭礼は新暦正月26日、5月26日、9月26日の年3回。山の神の氏子は8軒、氏神の祭当家とは別に、地神、山神（以前は水神も）の祭礼の当家を輪番制で務めている。当日は「山神王社 柿谷 氏子中」の幟を立て、供え物として御神酒一対と折敷<sup>おしき</sup>に入れた洗い米などを用意する。神職が神事を行い、神酒、塩、洗い米を周囲に撒く。



柿谷の山の神祭り

**福万谷** 地域の山神社として祀る。『徳島県神社誌』に「上福万169、主祭神 大山祇命 境内地361坪」（53頁）と記載されている。登り口には地神社、途中に黒岩神社の神輿の倉庫、おふなたさんの祠がある。祭礼は年に2回旧暦1月26日、9月26日。当屋は氏神の当家とは別に地神、水神の祭礼を古くからの住民13軒ほどが輪番制で務める。幟には「奉納 山守神社 平成十七年 十一月吉日 福万谷」とある。当家は供え物として海のもの山のもの7品などを準備する。戦後しばらくは山の神さんの日は当家

## 1)山の神信仰

がメガシ（生姜<sup>しょうが</sup>味のリング状の小麦菓子）を配ったので、子供たちが楽しみにしていた。

なお、福万谷・柿谷地区の地域の神社である黒岩神社の主祭神は大山祇命であり、山を司る神である。祭礼は年4回新暦1月18日、4月18日、7月18日、10月18日の年4回行われる。祭礼前の日曜日には、参道である山道の清掃が行われる。黒岩神社の祭礼には雨が降ったことがないと伝えられている。



福万谷の山の神祭り

**中津浦** 地域の山神社として雲水庵西の山の尾根上にある。細い山道を約15分ほど登るとやや広い平坦な土地があり、その北端に祠が4基並んでいる。中央の大きな祠が大山祇命、左横が富士権現<sup>ふじごんげん</sup>、あとの2基は詳らかではない。戦後しばらくは祭礼が中断していたが、杉本ヒデさんという、信心深い女性が信仰を続け、のち有志によって復活させたそうである。祭礼の当家は祭当家が担当し、中津浦60軒ほどを4班に分け輪番制としている。1班は13名から20名でほぼ全員で担当している。供え物は餅、御神酒、海のもの山のもの七品。祭礼の数日前には参道である山道を清掃し、当日、当家は神楽太鼓・御神酒・供え物などを持って参道を登る。神職による神事があり、御神酒、竹輪、ゆで卵などで賑やかに直会<sup>なごらい</sup>が行われる。「地神<sup>にぎ</sup>さんは農家の神さんやけど、山の神さんはみんなの神さん」ということから、10数名が参加している。新しい住人の参加も見られるようになってきた。中津浦では他に七社神



中津浦の山の神祭り

社に大山祇命が祀られている。

**大野** 大野地区はそのほとんどが平坦部であるが、七ツ山と称される里山の一部が含まれている。山の神は地域の神として大崎山山麓にある。急坂を登り



大野の山の神祭り

こんもりした林の中の大きな木の下に石を積み重ね、その上に石の祠が建っている。氏子は30軒で、山の神のみの当家で輪番制になっている。供え物は御神酒・折敷に入れた塩・洗い米で、神職による神事のあと、供えた米を撒く。

**橋本** 橋本地区の山の神は、冷田川沿いのT字路に地神塔と同じ基壇に並んでたつ。祠ではなく地神塔よりやや小さい五角柱で記銘に「南無山神」・「文化十二亥（1815年）九月吉日」また同柱に「南無水神」とあり、山神水神を同時に祀っている。祭礼は年に1回新暦1



橋本の山の神祭り

月26日。地神の祭礼と同様に注連縄を巡らせ、海のもの山のものを供え神職を招いて行われる。橋本地区は東西北とに分かれ、各班から1名ずつが当家を担当、地神祭の当人も兼ねている。また、同地区は田園地帯である

## 1)山の神信仰

が、向寺山で材木や薪を切り出す仕事に携わる人もいて、正月から26日までは山に入らないものとされ、26日の祭礼を終えてから山仕事を始めたと伝えられている。

なお、同地区の橋本家では向寺山の山の神に昭和40年代まで正月に小さな鏡餅を供えに行っていたとのこと。この山の神は文化の森文書館横の山へ登る道の左側山裾に現在も存在する。『八万村史』（274頁）の向寺山の山の神の可能性も考えられる。

**法花谷** 山道の脇に祠があり、地域の山の神と

して祀られている。『徳島県神社誌』に「境内71坪 祭神大山祇命 由緒不詳」（54頁）の記載がある。向かって左横に「紀譽太萬命」の記銘のある青石の碑がある。氏子は山を所有する10軒余り、祭礼は年に1回新暦の1月26日行われる。当家は祭当家の総代の中で山を所有する2～3名が担当、海のもの山のものを供え神職による神事が行われる。他に中富家など（祭礼は神職を招き新暦1月26日に行われている）個人で持ち山に山の神を祀る例もある。



向寺山にある山の神の祠



法花谷の山の神祭り

## (2)『名東郡下八万村分間絵図』に見られる山の神



②谷野家の山の神〔長谷〕



③藤岡家のりょうさん〔長谷〕

『名東郡下八万村分間絵図』には、長谷(6ヶ所)、中津浦(1ヶ所)の谷沿いに「山の神」の記述がある。人々の暮らしの中で、山の神に大きな位置付けがなされていたことがうかがえる。長谷では前述のように合祀をしたので、山の神の祭礼は四王子神社で行われている。では、200年前にはあった山の神の祠はどうなったのか、以下は絵図を元に追跡調査をしたものである。



原田・渡辺・長尾家の幟



④原田・渡辺・長尾家の祠〔長谷〕

## 長谷

①上長谷の山の神は、現在山道がないため確認不可能。

②谷野家で山の神として祀る。柿谷への山越えの道の側。石で囲った祠があるがご神体のようなものは見当たらない。祭礼は年1回で、年末に注連縄をする。



⑤猪谷家の山の神〔長谷〕

③藤岡家で祀る。「りょうさん（霊さん）」と呼ばれており、一宮長門守の姫を祀ったと伝えられている。年末には注連縄をして餅、御神酒を供えている。

④谷沿いの山道を行くと鬱蒼とした竹藪、そして石垣のみ残る屋敷跡がある。さらに登ると、山の斜面に大きな石を積んだ基壇の上に3基の祠がたっている。現在は杉正大明神、若宮大明神、船戸大明神として、それぞれ原田家・渡辺家・長尾家が祀っ



⑥水神社〔長谷〕

ている。三家はそれぞれの祭神を祀っているが、元々は兄弟であったという。古くは山麓に住んでいたが、「出屋敷」といって平坦地に下り家を構え現在に至っている。祠のある土地は「山の神」と呼び、祭礼は、三家の輪番制で、<sup>のぼり</sup>幟を順にまわしている。幟は「奉納 杉正大明神 原田・若宮大明神 渡辺・船戸大明神 長尾 昭和三十二（1957）年 三月吉日」とある。祭礼は年に2回、11月2日の四王子神社の秋の祭礼には幟を立て供え物をし、年末には幟を立て、海老注連縄、餅、お米などを供える。山に入った時には御神酒を供えているとのことであった。

⑤猪谷家での自宅の庭に祀る。猪谷氏の祖父の時代に山から自宅の庭に遷し

たものである。昔は正月5月9月の山の神さんの日に神職にお祓いをしてもらっていたが、今は四王子神社で行われる山の神の祭礼に参拝している。

⑥水神社近くの山麓にあったと思われるが、水神社のご神体である佐古石に大山祇命の記銘があり、合祀したのではないかと考えられる。

### 中津浦

⑦山の西側のいぬだにがわ乾谷川沿いに山の神が1ヶ所ある。昭和20年代には、大きな杉の大木があり、石を積んだ簡単な祠があった。近隣の松崎家では「山の神さん」とも「のうがみさん」とも言い、山仕事をしていた頃は正月前に注連縄をし、お餅を供えていた。しかし、砂防ダムの工事の際に土砂ごとどこかへ持ち去られてしまった。この山の神にお参りをしていた人は七社神社あるいは現在の山の神にお参りをしている。



⑦山の神跡〔中津浦〕

長谷の場合、③と④については山の神ではなく、別の神となって今も信仰の対象であり、大切に祀られている。⑥は水神社に罔象女命とともに大山祇命が並び祀られており、合祀された可能性が高い。②と⑤が今も山の神として信仰の対象になっているといえよう。時代の移り変わりとともに山の神の性格も移り変わったことがうかがえる。

中津浦では祠が土砂とともに失われたが、雲水庵西の山の尾根に大山祇命、富士権現が丁重に祀られ、その祭礼は人々の親睦の場ともなっている。

### (3) 八万町の山の神にかかわる伝承とその信仰

『名東郡下八万村分間絵図』によると、谷沿いのかなり上まで棚田耕作が行われていたことが判る。また、燃料となる薪も山に頼っていたので、山へ

入る道も整備されていた。春は節供の餅に使うサンキライ（サルトリイバラ）の葉やイタドリを採りに、夏は淵や溜池に泳ぎに、秋には栗拾い、年末には正月飾りの松の枝やウラジロを採りに出かけた。山は今よりももっと人々の暮らしに密着していた。

**事例1** 檜を植林している家では、山仕事と言えば夏は枝打ち、下草刈、冬は薪集めであった。集めた薪は<sup>ひさし</sup>庇の下に積み重ねておいた。持ち山には山の神の祠がある。〔長谷〕

**事例2** 一般に山の神の祭礼が行われる日を「山の神さんの日」といい、「山に入ってはいけない」といわれていた。それを破って山に入った人が、「綺麗なお姫さんがあらわれて、奥へ奥へと誘い込まれた」とのことであった。〔長谷〕

**事例3** 谷治いでは、大きな木を切って薪にする<sup>こま</sup>杣の仕事があった。牛を使いキウマ（木馬）に載せて運び出していた。また、女性や年配の人たちの仕事として、コクバ（落ちた松葉、火をつけるとばちばちと良く燃える）採りがあった。コクバは誰が採ってもよいとされていたので、八万の山のない地域からも採りに来て、背中に背負って帰っていた。昔は論田のあたりに<sup>もぶろ</sup>凜風呂があり、ここへ青い松葉を出すと高く買ってくれるといわれていた。正月開けの初めて山に入る時はヤマノクチャケといって、山の入り口付近に御神酒、<sup>おしき</sup>折敷に入れたお洗米を持っていて一年の無事を祈っていた。

**事例4** 昭和30年ごろまでは主な燃料は薪であったので、山の持ち主に断って山に薪を採りに行った。山の持ち主は<sup>おおむ</sup>概ね快諾をしていたが、採る者の礼儀として「鎌の柄より太い枝は採ったらいかん」といわれていた。山の神さんの日は木を切ってはいけない。〔中津浦〕

**事例5** 薪採りは冬の間の大切な仕事であった。山を所有する家では自分の持ち山を何区画かに分け、生えている木を売っていた。買った人は区画の木を自由に切って薪として持ち帰っていた。〔法花谷〕

山の神のほとんどが小祠として祀られ「山を守ってくれる神様、山に入る時に手を合わす」として敬っていた。そのため祠は山の麓より少し登った位



置にあることが多かった。また山の神の祭礼の日は「山の神さんの日」といい、「山の神さんの日は山に入ってはいけない、木を切ってはいけない」とされている。徳島県内でよく聞かれる、山に入ってはいけない日であるハテノハツカ（12月20日）についても、正月明けに行うヤマノクチアケも「昔聞いたことがあるがよくは分からない」という答えが多かった。また山の神が女性の神という伝承も聞くことができず、長谷での「お姫さん」にわずかにそれをうかがうことができた。

このように伝承は極めて少なく、山の神としての特徴はあまり見られない。禁忌も緩やかだったと考えられ、八万町の山の神は里山の山の神としてきわめて身近な存在であったことが想像される。



『名東郡下八万村分間絵図』に見られる山の神 ①～⑥ 長谷 ⑦ 中津浦

## 2) 祀られる武将の祠

### (1) 武将の祠

夷山には戦国時代の城跡があり、樵谷は古戦場だったと伝えられる。『八万村史』には3人の武将が祠として祀られていることが記載されている（331～332頁）。いずれも個人の土地に祀られているのが特徴である。

#### ① 柿谷 — 中山家の祠 —

『八万村史』によると「中山祠 字柿谷に在り。一宮長門守の弟成良なりなが（主計正かずえのかみと称し樵谷に戦死）を祀ると云ふ。」（275頁）とある。中山家の持ち山の尾根の上に祠がある。豊島



中山家の祠（柿谷）

石の立派な祠で、屋根は流破風ながれはふである。由緒等はよく分からないが、一宮城主の弟に当る成良を祀った中山祠の可能性が高い。当主が毎月一日にお参りをしている。古くは目印となる大きな松の木があった。

#### ② 福万谷 — 山口家の祠 —

『八万村史』によると「事勝祠 福万谷の内、樵谷に在り、古来伝ふる所に依れば一宮長門守此地に死せるを祀ると。往年蜂須賀家老、賀島某此処に山荘を構ふる際、地を掘りしに弓、矢、刀劍、古鏡等出でたるに依り、祠を谷北に祀り霊を鎮するに発掘せる古鏡を以ってす。その鏡璽は三百年

以上風雨に蝕され居たるが之を磨きて僅かに『事勝靈社大明神』の文字を読むを得たりと云ふ」（275頁）とある。

山口家で山の中腹に祠を祀る。急坂の山の斜面を



山口家の祠（事勝祠）（上福万）

5分ほど登ると1m弱の石積みの基壇の上に大小の青石、その上に石の祠が祀られている。下福万の町並みを一望する見晴らしの良い場所である。山口家では中山神社と称している。今から5代前の当主が（江戸時代末期か）、この地から鎧や鏡が出たので、掘り出して家に持ち帰ったところ、腹痛に悩まされたため、急ぎ元に戻して祠として祀ったとのことである。祭礼用の藍染の幟には「中山神社 明治四十三（1910）年十一月七日 山口姓」とある。祭礼は年1回、旧暦9月24日に行われる。古くは11月7日であったそうで、自宅で搗いた大きな鏡餅を供え、神職による神事後、鏡餅を近所11軒に切り分けて配っていた。近頃は山に登るのが大変ということで、家から祠の方に向かって、餅、煮干一對、海のもの山のものを供え、神職を迎えての神事が行われている。年末には当主山口正信氏が自ら鏡餅をつき御神酒を持って現地へ赴き、お参りを



山口家の祠の幟（上福万）

しているとのことである。

なお、山口家の屋敷地は「イズミダニ」と呼ばれているが、長宗我部軍に追われた一宮勢がこの地で冷たい「いずみの水」を飲んだからといわれている。現在この「いずみ」の上に家が建っているが、息抜きのパイプが施されており、いつでも使えるとのことであった。

事勝祠との関係については、昔は「ことかつさん」と呼んでいたとのことで、『八万村史』の家老賀島氏の山荘を作るために掘った、という記載とは若干違うが、他に該当するような祠がないので事勝祠の可能性は高いといえる。また、この山の周辺が古戦場であったことから「血凝谷」<sup>ちこりだに(ちころだに)</sup>とも呼ばれている。

③北地〔夷山〕 — 篠原祠 — 『八万村史』に「篠原祠 字北地に在り。夷

山城主篠原佐吉兵衛、永禄三年三好義賢に従ひ泉州久米田にて畠山右衛門督高政と戦ひ自殺す。其臣某、遺髪を持ち帰り此地に埋め其霊を祀りしものなり」(275頁)とある。祠は



篠原祠〔夷山〕

円福寺近くの民家の庭先にある。祠斜め前の鈴酒家で祀る。当主の鈴酒登<sup>すずきのぼる</sup>氏によると、鈴酒家は古くからの造り酒屋で、その関係で夷山城となんらかのつながりがあったのではとのことであった。なお、隣の敷地にある墓は鈴酒家出身の相撲取りのもので、その頃に酒造業も廃業した。

④ 橋本 — <sup>いちのみやながとのかみなりすけ</sup>一宮長門守成助の墓 —

一宮長門守成助は、<sup>てんしょう</sup>天正10（1582）年に長宗我部方により夷山城へ呼び出され弟成時と家臣若干人とともに謀殺されたといわれる。成助を葬ったといわれている墓は、夷山城跡南にあるアパート脇に、五輪塔と石碑がそれぞれ一基ずつたっている。

ところが、一宮成助の法名は「慈恩院端節一保大居士」（『阿波国徴古雑抄』212頁）とされ、この墓は<sup>けいあん</sup>慶安2（1649）年7月11日、法名は「秋月道運禪定門」となっている。



一宮成助の墓（橋本）

## 2 はちまんの谷と川

### 1) 水神信仰

#### (1) 地区別に見る水神信仰

水神は谷川の上流や山の水が落ちてくる淵などに祀られている。山の神と比べると数も少なく、祭礼が行われることも少ないが、八万町内には祠が数基存在する。

#### ①長谷

「カケの水神さん」と呼ばれ、長谷の水神として祀られる。四王子神社の飛地境内社。祭神は佐古石にみずはのめのみこと おおやまつみのみこと罔象女命、大山祇命の記銘がある。『八万村史』に「下長谷通称『カケ』の入口に在りと伝え言ふ。元禄年間蜂須賀隆重、富田御殿の泉水へ引水するに際し、下長谷『風呂ノ下』の堤を掘鑿して園瀬川の水を通じ四ヶ村用水を経て庭内に導きし当時、水神として祀りたるものこの社の初なりと」(273頁)とある。祭礼は年1回、11月2日の四王子神社の祭礼の日に行われる。祭日には「水神社」の幟を立て、鏡餅を供え、四王子神社の神輿を担いだ子供たちがお参りする。長谷の水神は1ヶ所。また、『名東郡下八万村分間絵図』には、「カケ」と記載されている。



水神社〔長谷〕

#### ②柿谷

柿谷では2基を確認した。1ヶ所は柿谷川の上流域にある溜池の北端。祠は溜池に向かって拝礼するように北向きに立つ。溜池については、『八万村史』

に「明治十七（1884）年 八万村水  
害予防組合の前身たる土功会の決議  
により溜池築造を決定す」（205頁）  
とある。灌漑地の恩恵を受ける二毛  
作田反当り4～5円、一毛作田2円、  
畑地1円他を土功会が負担とする  
ということ<sup>1</sup>で着手したものの、米価の



溜池の水神さん（柿谷）

下落などの困難を克服して完成したものである（206頁）。棚田耕作していた10軒ほどが出役をして土手を造った。現在も3軒が利用していて、ユル抜きも行われる水源地となっている。棚田耕作が行われていた頃には、水神（山の神・地神を兼ねる）の当家があり、神職を招いて土手で神事が行われていた。

もう1ヶ所は溜池横<sup>うっそう</sup>の鬱蒼とした茂みを抜け、谷川に沿った岩場を登ると沢沿いに大きな岩があり、その上に石の祠がある。水神として祀られていたようであるが詳細は不明で、祭礼も久しく行われていないようである。

### ③福万谷

福万谷川の上流域にある。水が細く流れ落ちている淵の傍らに青石（幅150cm、高さ50cm）を積み上げて囲った祠2基がある。向かって右が祇園さん、左が水神さんである。戦後しばらくは神職が祠まで赴き、神事を行っていた。この淵は牛淵と呼ばれ、棚田の水源地でもあった。当時は淵の下にも棚田があり、浅い淵なので小さな子供たちの遊び場になっていた。

祭礼は旧暦7月7日。当家は福万谷に昔から住む家13軒が中心に輪番制をとっている。現在は当家の家の床の間にモロブタか平盆に載せた御神酒、海のもの山のもの7品をお供えし、神職による神事が行われる。

#### ④橋本

地神塔と同じ台座にやや小さめの五角柱の心石が並んでたっている。記銘「南無水神」「正月七日」、他の側面に「南無山神」とある。水神・山神を同時に祀るのは、長谷の水神と同じである。

### (2) 水神信仰とその特徴

八万町では多くの水害の歴史があったことが『八万村史』にも報告されている。水を司る神として水神はどのような位置付けがされていたのだろうか。聞き取り調査を行ったが伝承については特に聞くことができなかった。祀られる場所については、長谷では用水の水口、柿谷では溜池の岸、あるいは沢沿いの大きな岩の上、福万谷では用水の水源であり、いずれにしろ水源が強く意識されていたと考えられる。地域で祭礼が行われているのは、長谷、福万谷、橋本で年に1回である。

なお、大野では八大龍王神社、中津浦では七社神社（七社神社のうちの一柱、『名東郡下八万村分間絵図』では当該地に「竜宮」とある）に龍王神を祀る。水神としての意識がどれほどあったかは不明であるが、中津浦では旱魃かんぼつじ時に龍王神に祈るとたちどころに雨が降ったともいわれている。



## 2) 谷と水と伝説とくらし

『名東郡下八万村分間絵図』には、寺山付近に「赤池」という池が記載されている（Cエリア参照）。『八万村史』に「閼伽池」として記載され、「金剛光寺の庭池」だったと伝えられる（44頁）。この池については次のような伝説もある。「生活に困っていた人が、法事の際に『すまんけん<sup>わんか</sup>とお膳を10人分お願いします。』と言うたら、明るる朝お膳がぼこっと浮いとったとか。」<sup>わんか</sup>椀貸し伝説の1種である。昭和20年頃にはうっそうとした藪<sup>やぶ</sup>の中の深い淵<sup>ふち</sup>だったという。この池にフナ釣りにも出かけていたという話を聞く。寺山あたりはフケタ（深田）が多かった。近くの用水や水田、園瀬川ではアユ、フナ、エビ、そしてたびたびあった大水の後に行くと、ナマズでも捕ることができた（大正8年生、男性）。

冷田川にも「小豆<sup>あずき</sup>洗い」の狸<sup>たぬき</sup>の伝説がある。橋の下に狸が棲んでいて、夜更けになるとときどき小桶<sup>おけ</sup>で小豆を洗うような音をさせて道行く人を驚かせていた。正体を確かめようと近づいて見ると、音は遠くへと消える（『八万村史』351～352頁）。

柿谷、福万谷、銅之鳥居などには溜池があった。眉山からの沢の

水、園瀬川から引き込んだ水が水源である。1枚1枚の水田につながる用水へと流れこむ。水車で水を取り込み、田植定規をつかって田植えをする写真のような風景も、今は昔のものとなった。池の堰や川の堤には不動明王がお



水車と田植の風景：宮ノ谷付近（昭和37年6月24日撮影、木村章氏提供）

かれ、池の水源近くには水神が祀られる。さらに柿谷川沿いに谷を登った用水の水源近くには、大岩の上に水神が祀られる（資料編:「水神信仰」参照）。戦前には秋の収穫が終わった頃、ユルヌキといって池の水を抜き、ウナギ、フナ、コイ、ナマズなどを捕っていた。水田、用水、池、川で漁撈<sup>ぎよろう</sup>ができた。漁師としてではなく、農家の仕事の、合間の楽しみとしての漁である。数人で言うジンゾク<sup>うけ</sup>の追い込み漁や、筥<sup>し</sup>をつかった仕掛け<sup>とあみりょう</sup>漁、投網漁も行われた。今はほとんど使うこともないが、改良し



用水に仕掛けられる筥（法花谷）

た仕掛け具を手元に持つ人もいる。初夏には、筥が用水に仕掛けられているのもわずかに現在みることができる。

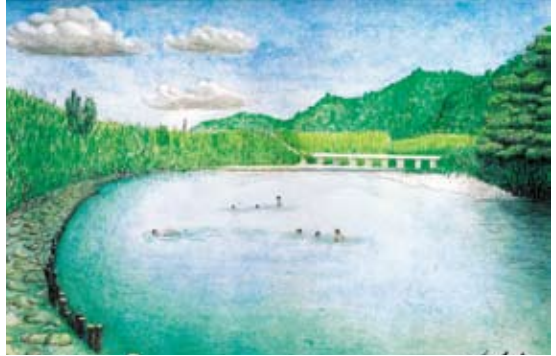
ほかにも川の利用方法はあった。園瀬川沿いに、昭和20年代には2軒<sup>さらし</sup>の晒屋があった。園瀬川にかかる晒屋橋という名前もそれに由来するものである。園瀬川の河原で布を広げて干す風景があった。また、園瀬川には、いくつもの堰があった（『名東郡下八万村分間絵図』B・C・Fエリア参照）。園瀬川の堤付近から水田に水を引き込み、水害から生活を守ってきた。その堰付近ではまた、水がよど



ウナギを捕るのに使われていたプラスチックパイプを利用した筥（大坪）



園瀬川河原の木綿干し  
(絵：中野昇氏、中野正治氏提供)



五輛から四ヶ所村堤・園瀬橋を望む：園瀬川橋西から東に向かって描く（絵：中野昇氏、中野正治氏提供）

み、魚が集まるため、夏の子どもたちの格好の遊び場だった。今は見られなくなったが、泳ぎ、魚を捕って遊ぶ子どもたちの姿があった。

谷に流れる水、川に流れる水は直接くらしと結びつき、その糧にもなっていた。灌漑用水であり、小舟を使った交通路にもなっていた。川と水は谷のくらしに深く結びついていた。と同時に、伝説にみるように一歩距離をおかねばならない畏怖の存在でもあった。たびたび起こる水害にも悩まされてきた。ときには、川で命を落とす子どももあった。川縁に立てられた数々の地蔵や不動明王などの石仏が、川の恐ろしさも伝え、教えてくれる。

園瀬川や冷田川が流れ、谷沿いや川沿いに集落がある八万町は、度重なる水害に悩まされながらも、水の恵みを受け、水とくらしが深く結びついた地域であった。

### 3 はちまんの里と祭り

#### 1) 地神信仰と社日

##### ◆八万町のお地神さん

八万町内には15カ所の地神塔がたてられており、そのうち14カ所で現在も春と秋の年2回祭りが行われている。古くから農業を営む人たちの間では親しく「じじんさん、おじじんさん」と呼ばれ、春には五穀豊穡を祈り、秋には収穫を感謝してお礼参りをしている。

町内の15基の地神塔全てが、徳島県下で見られる多くの地神塔と同じく、基壇の上に五角柱型の心石を立て、その各面に農業にかかわりのある5神、すなわちあまてらすおおみかみ天照大神・おおなむちのみこと大己貴命・すくなひこなのみこと少彦名命・はにやすひめのみこと埴安媛命・うかのみたまのみこと倉稲魂命の名を刻んでいる。このように形が一定しているのは、かんせい寛政元（1789）年（寛政2年という説もある）富田八幡宮（現・徳島市伊賀町の八幡神社）の神職はやくも早雲ふるとみ古宝が11代藩主はるあき治昭に進言し、藩命により五角柱型の地神塔建立が進んだためと考えられている（『日本の民俗 徳島』226～227頁）。

紀年銘があるものが少ないためたてられた年代など不明なものが多いが、長谷の地神塔台座には「てんぽう天保三（1832）年辰八月吉日」とある。橋本の地神塔に銘はないが、その横、同じ基壇上にたつ水神と山神の両方を刻んだ五角柱の石塔には「ぶんか文化十二亥（1815年）九月吉日」の銘がある。なお、地神塔と水神・山神が並べて祀られているのは八万町内ではここだけである。さらに、文化5（1808）年の『名東郡下八万村分間絵図』には、銅之鳥居と大野の2カ所に「地神」の表記があるが、他は見当たらない。これは、銅之鳥居は八幡神社、大野は八大龍王神社（現・西新浜町2丁目）のそれぞれ境内地に地神塔があったことと関係しているのではないか。大野では、平成元（1989）年11月にかこうがん花崗岩の地神塔に建て替えられた。その他は全て砂岩製である。

大きさは心石だけで比較すれば、一辺が12.0cm～17.5cm、高さが43.0cm～56.0cmと多少のばらつきは認められる。ただし、沖須賀の地神塔はもともと戸数が少ないという事情のためか、かなり小振りである（一辺8.5cm、高さ24.0cm）。が、ここでも個人ではあるが手厚く祭りが行われている。

～橋本の地神塔と水神・山神塔～

橋本の地神塔は、同じ基壇上に水神・山神が並べて祀られている。

同様の事例について、高橋晋一「地神塔と三神塔(続)」では、「寛政7(1795)年、地神に加え山神についても村々で祀らせるように早雲伯耆が藩に建白」として記録(史料)(『徳島地域文化研究』第3号、121頁)を紹介しつつ、「建白には、山分(山間部)の村々では早くから山神が祀られているが、里分(平野部)の村々においても洪水の害(さらには鳥獣の害)を防ぎ農業生活を安定させるため、地神に加え(洪水の淵源である山を司る)山神を祭るべきこと、祭日は正月7日・9月7日とすること、祭神は山神・木神・水神の三座であることなどが記されており、県内に残る三神塔は、この建白を受けて造立されたものと考えられる。」(『徳島地域文化研究』第3号、123頁)としている。さらに、橋本の水神・山神の石塔と地神塔を写真入りで紹介し、「いずれも水神の名が正面に刻まれ、また平野部の川縁に立てられていることから、洪水除けの神として祀られたものと考えられる。水神を(小祠や石碑の形で)単独で祀る事例は県下にも比較的多く見られるが、あえて山神と水神の名を併記した点に、寛政7年の建白の影響が感じられる。」(『徳島地域文化研究』第3号、130～131頁)と述べている。

橋本の地神塔を訪れたとき、冷田川のすぐ横という立地のこと、地神塔と水神・山神が一つの基壇上に並べてたてられていること、水神・山神が一つの石塔に刻まれていること、形が地神塔と同じ五角柱であること、水神・山神の記録の上に「南無」と冠されていることなど、不思議に思うことが多々あったが、この高橋論文により疑問がかなり解ける。

## ◆お地神さんの祭り

お地神さんの祭りは春と秋の年2回、社日しゃにちといって春分と秋分に最も近いつちのえ戊の日に行われている。社日は、節分や彼岸といった雑節の一つであり、生まれた土地の神うぶすながみ(産土神)を祭る日である。この日、農業の神・土の神であるお地神さんの前では、春には五穀豊穰を祈り、秋には収穫に感謝して祭りが行われる。

八万町内には地神塔が15カ所あるが、そのうち14カ所で今も祭りが行われている。(現在、沖須賀・法花傍示・犬山地区では神職による神事は行われていない。また、沖須賀は個人で祭りを行っている。)

### (1) 当とうや家

祭りの世話は、地域ごとに決められる当とうや家(“おとうやさん”などという)が受け持つ。当家の仕事としては、①社日の日時を住民に知らせる ②地神塔周辺の清掃および社日の飾り付け ③供物および神職への御礼の準備 ④直会の準備 ⑤祭りの後片付け などがある。

当家の決め方は、地域ごとに様々である。

ア) 昔から農業を営む氏子の中で1年または半年ごとの輪番制になっている。(長谷奥組・長谷下組・柿谷・福万谷・中津浦・夷山・橋本・法花谷・法花傍示・犬山)

イ) くじをひいて決める。(長谷中組・大野)

ウ) 町内会の中で新旧の住民の区別なく、町内会の役の1つとして選ばれる。(銅之鳥居・市原)

銅之鳥居は、町内会の組ごとに1名ずつ当家を決めている(1年交替・輪番制)。長谷・橋本では、祭事に関しては地域を3つに区切り、各々当家が決められる。市原・夷山・犬山・法花谷のように、1つの地域で複数の当家を決めているところもある。中でも市原・夷山・法花谷では、祭事のための

グループが決められており、持ち回り制となっている。

長谷中組では、11月2日の四王子神社の祭りの前夜、その年の八幡神社の  
 当家（大当家）または馬<sup>うまどうや</sup>当家の家に集まり、大と小の穴を開けた紙を丸めて  
 お盆にのせたくじを引いて次の年の春・秋それぞれの当家と副当家を決める。

大野では、八<sup>はっさく</sup>朔（旧8月1日）の日、現在では9月第1日曜日に集会所に  
 集まり、こよりに印をつけたくじを引いて当家を決める。

八万町は宅地化の進行が著しく、人口流入が激しい地域であるため、農  
 業や土地との結びつきの強い地神の祭りは、新しい住民にはなじみが薄いも  
 ののである。銅之鳥居・市原のように町内会として新しい住民を取り込  
 んで当家を決めているところもあるが、それ以外の地域では昔ながらの農家  
 や住民が中心となって祭りの世話をやっている。

## (2) 飾り付け

ほとんどの地域で祭りの前日から準備を行っている。

- ア) 地神塔とその周辺を清掃する。
- イ) 地神塔の四隅に笹竹を立て、それ  
 に注連<sup>しめなわ</sup>縄を張り巡らせ、紙垂<sup>しで</sup>を付  
 ける。
- ウ) 幟<sup>のぼり</sup>を立てる。



飾り付け（福万谷、2005年9月）

その他、長谷では祭り当日、神  
 事の際に四王子神社の太鼓が地神塔の前に据え置かれる。

幟は、五祭神名を1本ずつに記したもの（夷山）の他に、五祭神名を1本  
 の幟に記したもの（長谷奥組）、「天照皇大神」（銅之鳥居・中津浦）、「地神社」  
 （長谷中組・市原・法花傍示・大野・沖須賀）、「地神五社大明神」（長谷下組）、  
 「地神五柱大神」（橋本・法花谷）、「恭祭地主神」（柿谷・福万谷）と染め抜

かれたものが1～3本立てられる。

なお、これらのものは祭り当日の夕方まで飾られる。(橋本・法花谷では、神事や直会の後すぐに片付けられる。また、犬山では、次の社日までそのままにしておく。)

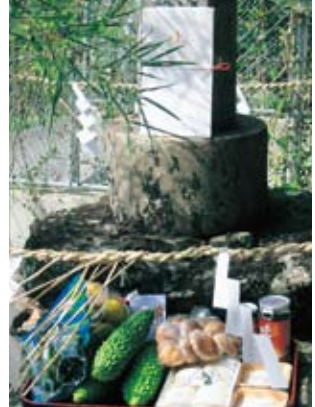
### (3) 供え物

供え物は、一般に「海のもの・山のもの」と呼ばれるものが準備され、社日当日の神事に先立って地神塔の基壇上あるいは供物台(銅之鳥居・夷山・法花谷・大野)の上に供えられる。

具体的には、鏡餅(二段重ね)、御神酒、米、塩、野菜(ダイコン・ニンジン・キャベツ・キュウリなど)、果物(リンゴ、バナナ、ミカンなど)、乾物(干し椎茸・昆布・高野豆腐など)、菓子などで、これらを三方やお盆の上のせて供える。

今は当家が準備するところがほとんどだが、以前は銘々の家で餅をつき、お地神さんに供えていたところもある。

市原では平成17(2005)年頃まで氏子が銘々鏡餅や御神酒を持ち寄って供えていた。



供え物(福万谷、2006年9月)



供え物(中津浦、2005年9月)

### (4) 宵地神

八幡神社(銅之鳥居)の地神塔では、社日前日の夕方、割木を燃やしその火に当たる宵地神という風習が今でも残っている。

社日の「前夜地神社頭に薪を積んで神に供へる篝火をたき此の火に当たると



風邪に侵されないと云ふ。」(『八万村史』384頁)と書かれているように、「火に当たれば風邪をひかないから当たっておいで」と親に送り出されたという子供の頃の思い出を地元の方が語ってくれた。



宵地神（銅之鳥居、2008年3月）

この宵地神は、現在の八万町内では銅之鳥居だけで行われている。社日前日の午後、銅之鳥居町内会17組から各々選ばれた当家が集まり、地神塔周辺の掃除と社日の飾り付けを行ったあと、夕方6時半頃再び集まり、地神塔の前で宵地神が始まる。現在はドラム缶を縦半分に切ったものを横に倒し、その中で割木を燃やす。それ以前は、直接、地面の上で割木（現在のものより大きい）を燃やしていた。燃やす木は何でもよく、以前はよく燃えるため松を用いていた。

集まってきた人々はこの火の回りを取り囲み、「病気をしないで一年間健康に過ごせますように」と祈りながら火に当たり、煙を体にこすりつけたりしながら四方山話よもやまばなしに花を咲かせる。これは30分ほどで終わり、火の始末をして片付けたあと散会となる。

なお、柿谷と福万谷では社日の前日に神事が行われており、同じく宵地神と言われている。かつて神職は現在の八万町より広い地域に点在していた地神塔を歩いて巡っていたため、社日一日では回りきれなかった。そのため柿谷と福万谷では昔から社日より一日早く祭りが行われており、それが今も引き継がれている。

### (5) 神事

八万地域では、富士氏と鳥居氏の



神事（大野、2008年9月）

2名の神職が朝7時から銅之鳥居の地神塔で神事を行った後、手分けして各地神塔を巡っている。巡る順番や時間はほぼ毎回同じで、それに合わせて当  
家や氏子たちが地神塔に集まってくる。参列者は1人～10人程。

神職が到着すると参列者は神職の後ろに立ったまま、あるいは敷物の上  
に座って並び、神事が始まる。神事はまず、神職が<sup>ほらえことば</sup>祓詞をあげる。次に、  
<sup>おほはらえのことば</sup>大 祓 詞をあげるが、このとき他の神事の場合と同様、長谷では四王子神社  
から持ち出した太鼓を神職富士氏が、また神職鳥居氏は太鼓に代わる<sup>すりがね</sup>摺り鐘  
を用意してそれを打ち鳴らす。最後に<sup>のりと</sup>祝詞があげられる。なお、米や塩が供  
えられたところでは祈祷後、清めと感謝のため参列者の手によって台座上に  
まかれる。あるいは御神酒をまくところもある。

また、中津浦では、基壇上にろうそくが2本灯される。

柿谷・福万谷では、神職が五神名を記した御札を台座に<sup>みたまい</sup>供え、御魂入れ  
という神事を行ったのち、当家から各家に配られている。各家ではそれを神  
棚にまつている（春・秋2回）。以前は、家によっては台所近くの雨戸の内  
側に山の神の御札などとともに貼っていた。

### (6) <sup>なおり</sup>直会

神事後、地神塔の前に敷かれた敷物の上で、または集会所で神職・参  
列者がともに供え物のお下がりをいただき、語らう直会が行われる。

銘々に御神酒が配られ、菓子など  
がふるまわれる。こうして神が召し  
上がったものをいただくことにより、  
元気をいただくのだという。

直会は以前ほとんどのところで  
行われていたようだが、現在も引き続  
き行われているのが、銅之鳥居・市



直会（中津浦、2005年9月）

原・夷山・中津浦・法花谷・法花傍示・犬山・大野である。銅之鳥居や法花傍示・犬山では、その場で鏡餅が切り分けられ、銘々持ち帰る。橋本でも以前は同様のことが行われていた。昔は農家の公の休みとして、子供から大人まで一堂に集まり、持ち寄ってきたご馳走を食べたり、語り合ったりする憩いの場であった。



直会（夷山、2005年9月）

銅之鳥居では以前、子供にメガシ（真ん中に穴の開いた麦菓子）をふるまっていた。それを子供たちはY字型の木の枝に差したりして持ち帰った。福万谷では戦後間もない頃まで、このメガシをわらに通したものを御札と一緒に当家が各家に配っていた。他にも子供に菓子を配っていたところがあり、子供にとっても地神の祭りの日は楽しみだったに違いない。また、社日に各家で餅をついたり、寿司を作ったりして親戚などに配る風習があった。

## （7）言い伝え

お地神さんの日（社日）には「田や畑に入ってはいけない」「土をいじってはいけない」という言い伝えは、八万町内のどこに行っても耳にすることができる。実際、福万谷のある農家では今も「社日には土を動かさないようにと聞いている。神様が畑にいるので、この日畑仕事はしないようにしている。」という。これは、「お地神さんの日くらい休め」ということばが象徴しているように、かつて田や畑に毎日出て休むことなく働いていた農家にとって、公然と休むことのできる日であったのだろう。現在はそうした風習はなくなりつつあるが、言い伝えは人々の間でしっかりと語り継がれている。

## 1) 地神信仰と社日



銅之鳥居（八幡神社境内）



市原（蛭子神社境内）



柿谷（福万谷へ向かう峠付近）



福万谷（上福万東山裾）



見立（夷山緑地北西付近）



橋本（冷田川・橋西詰付近）



中津浦（中津浦東山裾）



沖須賀（大野橋北詰付近西側）

1) 地神信仰と社日



夷山 (冷田川・橋西詰)



法花谷 (法花谷公民館前)



法花傍示 (法花 桜山西山裾)



犬山 (八坂神社境内)



法花 (法花小橋南詰付近東側)



長谷 (八万温泉西側)



大野 (西新浜町2丁目 八大龍王神社境内)



## 2) 庚申塔と庚申信仰

八万町内では7基の<sup>こうしんとう</sup>庚申塔が確認できる。それぞれの庚申塔とそれに関わる伝承をまとめた。



大野の庚申塔

### ◎大野の庚申塔

「<sup>えんぼう</sup>延寶五丁巳（1677）年十月十六日」の<sup>めい</sup>銘。庚申の日の夜には豆腐を食べる。母がつくった団子を子供がお供えし、その数だけさげてもって帰ってくる。60日に1回お礼参りをする。発音が不自由な人は、水を受けてくる。

### ◎犬山の庚申塔

犬山名（法花10軒、犬山20軒程度）で祀っていた。「<sup>えんぼう</sup>延寶四（1676）年十月庚申日」の銘。川原で拾ってきた穴のあいた石を藁縄に通し、輪をつくる。犬山の子供達がよってきて、手送りしながら般若心経を唱えた。終わった後、子供にはおやつをくれた。先輩から後輩へと教えていった。戦後10年くらいは行われていた。戦後30年くらいまでは、花と団子を供えていた。



下福万の庚申塔

### ◎下福万の庚申塔（瑜伽神社境内）

『八万村史』では、「青面金剛（切支丹燈籠）」（286頁）とされるが、庚申さんとして祀られていた。失せものに御利益があるとされる。

### ◎夷山の庚申塔

「<sup>ほうれき</sup>宝曆七丁丑（1757）年十月<sup>ついたち</sup>朔日」の銘。軒に穴のあいた石がぶら下げ

られている。耳が聞こえやすくなるよう穴のあいた石を納めて願掛けをした。戦後まもなくのころ、堂の前でごちそうを食べたことがあった。遠くから参る人もいた。庚申の日には、夫婦添い寝をしてはいけないといわれていた。60日に1回の庚申の日には今もお参りする人もいる。昭和30年くらいまでは、夜には若い人が集まって夜通し話し明かしていた。その際、白い餅を家々でお供えし、若い人はぜんざいにして食べた。米団子を供えていた家もあった。

庚申の掛け軸を床の間にかける家もある。目がよく見えるように、耳がよく聞こえるように、疣いぼがとれるようにと願掛けしたという。



庚申の掛け軸〔夷山〕

### ◎宮ノ谷（銅之鳥居地区）の庚申塔

「元禄三庚午（1690）年十二月四日」の銘。伝承は20軒ほどでは確認できなかった。

### ◎中津浦の庚申塔

北向地蔵きたむきじぞう、光明真言塔こうみょうしんごんとう、庚申塔がある。3体の猿さるが刻まれている。延宝4（1676）年造立で大野、犬山の庚申塔とほぼ同時期につくられている。



福万谷の庚申塔

### ◎福万谷の庚申塔

黒岩神社の登り口の鳥居から西に竹藪を進むと古屋敷跡があり、そこに庚申塔が祀られる。3体の猿さると雄雌にわとりの鶏ほが彫られている。

### 3) 四季の祭り

先に紹介した山の神の祭り、水神の祭り、地神さんの日などのほかに、各地区にある神社や小祠、個人宅の屋敷神や荒神、各寺院での年中行事が行われている。平成20年度に調査した八万町の祭り等について、写真を中心にその一部を紹介する。

#### 《春》

八幡神社の春祭り（太々神楽） 4月15日〔八万町全域ほか〕

天一神社の春祭り（太々神楽） 4月28日（旧暦3月23日）〔長谷、銅之鳥居、市原、見立、中津浦、橋本、夷山、法花ほかの各地区〕



八幡神社での太々神楽（巫女の舞）



天一神社での太々神楽（巫女の舞）

各地区の総代を中心に多くの氏が集まり行われる。神事後、太々神楽とよばれる巫女みこによる舞が舞われる。巫女は榊山さかきやまの周囲で舞い、祭りが終わると、参拝者は榊を家に持ち帰る。

#### 《夏》

八坂神社の夏祭り 6月22日〔犬山地区〕

蛭子神社の夏祭り 7月10日〔市原・見立地区〕

八幡神社の夏祭り 7月15日〔八万町全域ほか〕

黒岩神社の夏祭り 7月18日〔福万谷・柿谷地区ほか〕



八大龍王神社の夏祭り 7月20日〔大野地区〕

天満神社の夏祭り 7月25日〔法花・法花谷・法花北地区〕

夏越<sup>なごし</sup>の祓<sup>はら</sup>いとも呼ばれる祭りで、疫病除けの祓いと祈願が行われる。身代わりとなる人形祓いも行われるほか、神社の鳥居には茅<sup>も</sup>の輪がつくられ、これをくぐることで疫病除けの祈願をする。



蛭子神社での夏祭り（宵祭り）



蛭子神社の宵祭りでの直会の風景。参加者全員でお粥を食べ無病息災を祈願する。



八幡神社での夏祭り（夏越しの祓い）



八幡神社につくられた茅の輪



八大龍王神社の夏祭り



天満神社につくられた茅の輪

### 3) 四季の祭り

#### 《秋》

黒岩神社の秋祭り 10月18日〔福万谷・柿谷地区ほか〕

天一神社の秋祭り 10月21日(旧暦9月23日)〔長谷、銅之鳥居、市原、見立、中津浦、橋本、夷山、法花ほかの各地区〕

若宮神社の秋祭り 11月2日〔夷山地区〕

四王子神社の秋祭り 11月2日〔長谷地区〕

天満神社の秋祭り 11月2日〔法花谷・法花・法花北地区〕

八坂神社の秋祭り 11月2日〔犬山・大野地区〕

八幡神社の秋祭り 11月3日〔八万町全域〕

八大龍王神社の秋祭り 11月4日〔大野地区〕

八幡神社をはじめ、各地区の秋祭りでは、神輿のほかに屋台が出る祭りがある。これは、「維新前後北地及び法花谷から共有林整理の経費等によって屋台を造り祭礼に用ふる様になり」(『八万村史』390頁)との記述もあり、明治初めころから屋台がつくられていたことがわかる。また、秋祭りに神馬を奉納していた名残からか、祭り当<sup>とうや</sup>家の家では祭壇をつくり馬幟をかかげ、これを祭りにも持ち寄る。江戸時代には、祭礼の余興として市原の御旅所から八幡神社社前の間で競馬が行われていた、という伝承が『八万村史』(392頁)に記録されている。



黒岩神社御旅所での神事。両脇には馬幟をもつ福万谷、柿谷地区の当家が立つ。



天一神社の神輿の巡幸。本殿から御旅所2ヶ所へと山道を向かう。

### 3) 四季の祭り



若宮神社〔夷山〕の秋祭り



八坂神社〔犬山〕の秋祭り。子供神輿が氏子各家を巡る。



八幡神社秋祭り〔八幡神社御旅所〕



八幡神社の秋祭り〔大坪付近〕

### 《冬》

蛭子祭り 1月10日〔市原・見立地区〕

瑜伽神社（慈眼庵）での大般若経会 1月23日〔下福万〕

初天神祭り（天満神社） 1月25日〔法花谷・法花・法花北地区〕



瑜伽神社での大般若経会〔下福万〕



天満神社・神主による朝日舞が奉納された。〔法花谷〕

## 4 写真にみるあこのころの八万町

八万町にお住まいのみなさまより提供いただいた八万町の景観がわかる写真等を掲載した。移り変わる八万町の中で、過去に写真に撮られた祭りや古い景観の記録である。



上：法花谷のだんじり屋台

〔昭和 12 年撮影、吉本健二氏提供〕

場所は富田浜で右後方に富田橋が見える。旧の屋台で大太鼓 1 人、小太鼓 2 人が上に乗り、鉦 2 人と笛 2 人が台の下に乗っている。



左：八幡神社の秋祭りの屋台

〔大正 9 年 9 月 28 日撮影、東條善雄氏提供〕



**八幡神社の秋祭り**

〔撮影日不明、東條善雄氏提供〕

柿谷付近を通る屋台行列を水田越しにみる。



**八幡神社の秋祭り**

〔昭和36年10月15日撮影、木村章氏提供〕

屋台の行列が小休止をとる。手前の男性はリヤカーに積み込んだ酒を一杯飲んでいる。



**八幡神社の秋祭り**

〔昭和36年10月15日撮影、木村章氏提供〕

稲の刈り入れが済んだ田の脇を進む秋祭りの屋台行列。



#### 八幡神社の秋祭り

〔昭和36年10月15日撮影、木村章氏提供〕  
八幡神社参道にならぶ11台の屋台と大勢の参拝者の姿がみえる。



#### 園瀬川堤防の一本松

〔昭和36年10月15日撮影、木村章氏提供〕  
橋本の園瀬川堤防にあった一本松で、4と9のつく日には火の玉が出たという伝説がある。枯れ、切り倒されて今はない。



#### 園瀬川の晒屋

〔昭和40年2月28日撮影、中野正治氏提供〕  
園瀬川沿いにあった晒屋が、白い綿の布を洗い、川原で天日にあてて漂白、乾燥させているところである。背後に園瀬橋がみえる。撮影は木村章氏。



**柿谷川で遊ぶ子どもたち**

〔大正の頃の撮影、東條善雄氏提供〕

柿谷川で網をもって何かを探す着物姿の子どもが写っている。



**園瀬川の氾濫**

〔昭和25年9月5日撮影、木村章氏提供〕

法花橋の下、南岸の堤防が決壊し大洪水になった。撮影は後藤実氏。



**式丈の堰付近で遊ぶ子どもたち**

〔昭和27年7月9日撮影、福山愼二郎氏提供〕

農業用水の取水用に園瀬川につくられていた堰の付近で子どもたちが遊んでいる風景が写されている。



**香留山中腹から八万地区の俯瞰1**

〔昭和30年1月23日撮影、木村章氏提供〕

南西方向に向かい中津浦、福万、城南町、千鳥付近が見渡せる。



**香留山中腹から八万地区の俯瞰2**〔昭和34年10月11日撮影、木村章氏提供〕

南方向に内浜、夷山、式丈、犬山方面を望み、遠くに七ツ山が見える。





**夷山の石塀**

〔昭和45年6月30日撮影、木村章氏提供〕

夷山の石塀沿いの道で撮影したもの。



**宮ノ谷の小川の水車と桶**

〔昭和37年6月24日撮影、木村章氏提供〕

園瀬川の分流が宮ノ谷付近を流れ、灌漑用水として利用されていた。



**白煙をあげて走るSL**

〔昭和41年3月27日撮影、木村章氏提供〕

田園風景の中を地藏橋方面へ向けて走るSL。



#### 雲水庵

〔昭和34年10月11日  
撮影、木村章氏提供〕  
中津浦の雲水庵跡に残  
されていた建物。背後に  
眉山の山並みが見える。



#### 長久寺

〔昭和34年10月11日  
撮影、木村章氏提供〕  
宮ノ谷にある長久寺。



#### 養老軒跡付近

〔昭和47年2月20日撮  
影、木村章氏提供〕  
法花谷の養老軒跡付近  
で、最近まで水路は残っ  
ていた。



**夷山城趾**

〔昭和47年2月20日撮影、木村章氏提供〕

写真では池となった古い河跡湖が見えるが、現在は墓地と公園になっている。



**中津浦**

〔昭和47年2月20日撮影、木村章氏提供〕  
中津浦の雲水庵跡方面へ向かう道沿いだろ  
うか。大木が見える。



**天満神社の秋祭り**

〔昭和35年秋撮影、吉本健二氏提供〕  
天狗、大太鼓、小太鼓2人が写っている。

## 〔Ⅲ〕 参考文献 ～もっと知りたい人のための参考書一覧～

- 阿波の峠を歩く会編 2006 『阿波の峠と里山歩き』阿波の峠を歩く会
- 阿波史学会ふるさと班編 1977 「ふるさと散歩1～18」『徳島新聞』夕刊、6月15日～7月8日掲載
- 飯田義資編 1960 『名東郡史』名東郡自治協会
- 磯本宏紀 2002 「春を知らせる年中行事-徳島県の太々神楽-」『徳島県立博物館ニュース』47、徳島県立博物館
- 磯本宏紀 2007 「眉山山中に残る沢の祠（徳島市八万町柿谷）」『徳島県立博物館ニュース』69、徳島県立博物館
- 大江匡弼 1987 「神仙靈章春秋社日醮儀」『神道大系 論説編16 陰陽道』神道大系編纂会
- 神河康倉編 1973 『阿波国最近文明史料』臨川書店
- 金沢治 1974 『日本の民俗 徳島』第一法規出版
- 小杉邨郎編 1913 『阿波国徴古雑抄』日本歴史地理学会
- 佐野之憲編 1976 『阿波誌（復刻版）』歴史図書社
- 高田豊輝 1998 「地神塚と山の神祠」『ふるさと阿波』8～12、阿波郷土史会
- 高田豊輝・稲井敬二 2001 「徳島市八万町の一宮長門守の墓について」『ふるさと阿波』187、阿波郷土史会
- 高橋晋一 2000 「地神信仰に見る均質性と多様性-徳島県那賀郡那賀川町の事例より-」『日本の石仏』96、日本石仏協会
- 高橋晋一 2004 「地神塔と三神塔」『徳島地域文化研究』2、徳島地域文化研究会
- 高橋晋一 2005 「地神塔と三神塔（続）」『徳島地域文化研究』3、徳島地域文化研究会
- 竹内金二ほか編 1935 『八万村史』八万村青年団
- 田中省造編 1998 『徳島県寺院事典 上』しゃくなげ会
- 徳島史学会編 1995 『新版 徳島県の歴史散歩』山川出版社
- 徳島県教育委員会編 1966 『徳島県文化財調査報告書第9集』徳島県教育委員会

- 徳島県教育委員会編 1968 『徳島県文化財調査報告書第10集』徳島県教育委員会
- 徳島県教育委員会・徳島新聞社編 2007 『徳島の文化財』徳島県教育委員会・徳島新聞社
- 徳島県神社庁編 1981 『徳島県神社誌』徳島県神社庁
- 徳島県物産陳列場編 1914 『阿波藩民政資料』徳島県物産陳列場
- 徳島県立図書館編 1980 『ふるさと散歩』徳島県立図書館
- 徳島市教育委員会社会教育課編 1989 『徳島市の石造文化財 本文編』徳島市教育委員会
- 徳島市教育委員会社会教育課編 1989 『徳島市の石造文化財 資料編(1)』徳島市教育委員会
- 徳島市教育委員会社会教育課編 1989 『徳島市の石造文化財 資料編(2)』徳島市教育委員会
- 徳島市教育研究所編 1958 『徳島市誌』徳島市
- 徳島市史編纂室編 1993 『徳島市史 第4巻』徳島市教育委員会
- 徳島市八万町郷土会編 1962 『徳島市八万町郷土誌 第1集』徳島市八万町郷土誌会
- 徳島新聞八万専売所編 『タウンニュースふれあい』徳島新聞八万専売所（※関連記事多数のため個別の記載は割愛しました。）
- 橋本幸四郎 1984 『八万わがふるさと』第一出版
- 八万小学校百年史編集部 1979 『八万校百年史』八万小学校創立百周年記念事業協議会
- 八万地区文化おこし委員会編 1991 『徳島市八万地区郷土マップ』八万地区文化おこし委員会
- 八万町郷土会編 1962 『八万町郷土誌 第1集』八万町郷土会
- 名東郡史統編集委員会編 1971 『名東郡史 続編』名東郡自治協会
- 両角芳郎 2004 「上八万盆地の園瀬川の古流路」『徳島県立博物館ニュース』56、徳島県立博物館
- 山瀬佐蔵 1808 『名東郡下八万村分間絵図』

## 【協力者一覧】

本書作成にあたり、多くの方々のご支援、ご協力をいただきました。ここに記して感謝申し上げます（50音順、敬称略）。また、このほかにも多くの方にお世話になりました。本当にありがとうございました。

有持幸子、猪頭義一、猪頭ふみ子、猪谷 忍、石原 侑、泉 昇一、伊勢ひとみ、井上 博、井上峰子、岩佐桂吉  
馬詰英男、馬詰保子、円 福 寺、大貝篤行、大橋関世、岡崎 清、岡田スエ子、大坪みつる、小笠原幸雄、小川清文  
越久田貞子、落合義晴、兼子民子、河口春己、喜多 勇、木村 章、桑村嘉次郎、注 明 堂、後藤 実、古林敏夫  
齋藤定一、桜木ユキ子、佐々木賢代子、澤田妙信、四宮智加男、下村愛子、下村良二、庄野幸一、庄野ヒロ子、丈 六 寺  
杉本利夫、杉本輝夫、杉本深雪、鈴酒 登、高田マサエ、田上倉平、竹内悦子、竹内キミエ、竹内 進、竹内初子  
立石孝子、田中明伯、田中 功、谷野久夫、谷野 勝、谷野裕美、田村 正、長 久 寺、出口克己、東條善雄  
徳 島 県 立 図 書 館、豊田順子、豊田靖匡、鳥居邦男、鳥居健男、中田君子、中富平八、中富ツルエ、中野 昇  
中野正治、中野雅美、中山 孝、長尾英子、長尾喜昭、橋本みさ子、橋本芳行、服部富夫、浜田武夫、浜田 守  
原ヨシミ、原田トヨ、原田 弘、原田 豊、林 史郎、林 俊彦、林 吉彦、福島智秀、福島秀雄、福島芳子  
福田幸一、福原健生、福本利幸、福本満智子、福山嶺二郎、福山博之、福山房子、福山文雄、富士和子、富士正治  
富士泰明、藤岡順次、藤岡道雄、藤本和子、ニッ橋満瑠、船越二三夫、本田治久、本田 一、福本 繁、福本利幸  
松崎 勝、松崎肇子、箕村勝昭、宮崎キノエ、宮本悦子、宮本ミツル、百々純代、森 英雄、矢田幸子、矢部茂雄  
藪内栄子、藪内央也、山口重子、山口忠良、山口正信、山田 工、山本花子、吉兼 剛、吉川慎一、吉本和子  
吉川文子、吉本健二、渡辺政行

裏表紙の写真：ユウガサン（慈眼庵）の狛犬

平成20年度文化庁芸術拠点形成事業（ミュージアムタウン構想の推進）

# 八万町の昔を探ろう

「八万町の昔を探ろう」から地域をプロデュースするプロジェクトガイドブック

2009年3月20日発行

編集・発行 「八万町の昔を探ろう」から地域をプロデュースするプロジェクト実行委員会

印刷・製本 徳島出版株式会社

実行委員会事務局

〒770-8070 徳島市八万町向寺山（文化の森総合公園）

Tel 088-668-3636 Fax 088-668-7197

<http://www.museum.tokushima-ec.ed.jp/hachiman2008/>







